

令和5年度

入賞作品集



「少年の主張」
中学生話し方大会



「家庭の日」に
関する作文・図画

青少年育成の基本指針

(昭和 52 年 6 月 1 日青少年育成広島県民会議制定)

前 文

「青少年は日本の希望である」という言葉は、われわれの心を支えている標語である。ところが、青少年の非行が問題になると、明確な実施効果の見定めもつかぬままに、条例や法律の制定に期待の高まるのが実状である。しかし、青少年の非行が大人の生活の反映であるとすれば、青少年の健全育成は、大人の反省なしには実現しないであろう。大人がかつて青少年であったように、青少年はやがて大人になるのである。人間の生涯は、多様な価値観の個性的選択による自己教育の連続であるといえよう。

ここに制定された青少年育成の基本指針は、ただ青少年育成のあり方を抽象的に示したものに過ぎない。それは、各地域の実状に応じて具体化されることが期待される。総括的にいえば、資源の乏しさを克服して、相当高い生活水準に到達している現代日本において、青少年は将来どのような展望をもって進んだらよいか、これが最大の課題である。

われわれは、青少年の前途に幸福の「青い鳥」の夢を託したい。

青少年育成の基本指針

(個人)

一 個性の独自性に対する自覚にもとづき、その価値可能性を錬磨し、生涯教育の基礎をつくる。

(社会)

一 家庭の愛情にはぐくまれ、社会生活において、友情と連帯の意識を養う。

(自然)

一 国土の自然を愛護するとともに、地域社会の文化を尊重し、環境の教育的整備につとめる。

(世界)

一 諸民族の生活と文化を理解し、平和と親善の心をこめて、国際交流に寄与する。

(総括)

一 日々の生活のなかに、生きがいを求めてわが道を行き、一隅を照らす光となる。

は じ め に

「少年の主張」・中学生話し方広島大会2023（第45回「少年の主張」広島県大会、第57回中学生話し方大会）を広島県中学校話し方連盟、独立行政法人国立青少年教育振興機構と共催で、令和5年9月2日（土）に開催しました。

今大会には、県内中学校の49校から3,006編の応募があり、その中から原稿審査を通過した15名が、会場において、それぞれの主張を力強く発表していただきました。

発表内容としては、県内各地からの出場があり、学校、地域、個人的な体験を含め自分の周りの特徴をうまくまとめるとともに、自分の身近な体験を通して社会への目を開き、自分の考えや意見を発表していただいた点に敬意を表したいと思います。

この作品集は、発表者全員の発表内容を記録しております。

「家庭の日」に関する作文・図画は、県内の小・中学生を対象に募集を行い、県内の小学校37校、中学校40校から作文・図画を合わせて1,563作品の応募がありました。

これらの作品は、日常生活において家族と自分とのかかわり方で感動したこと、家族に感謝している心や存在の大切さなど、自分の気持ちを素直に純粋に表現しています。

応募作品の中から事前審査を通過した作文30作品、図画211作品を厳正に審査し、特選作文3作品、特選図画1作品、入選作文19作品、入選図画5作品を掲載しております。

この作品集を多くの皆様にご覧いただき、小・中学生の思いを受けとめていただければ幸いです。

終わりに、この事業の実施に当たりご協賛いただいた国際ソロプチミスト広島、広島清流ライオンズクラブ、公益財団法人広島青少年文化センター及び県内13ロータリークラブ並びにご協力いただいた関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年12月

公益社団法人青少年育成広島県民会議

会 長 神 出 亨

「少年の主張」に関する目次

○第45回「少年の主張」広島県大会・第57回中学生話し方大会会場風景	1
○第45回「少年の主張」広島県大会・第57回中学生話し方大会発表者一覧	2
○受賞者一覧	
広島県知事賞	
まずは地域から	尾道市立日比崎中学校 3年 <small>きたぐち みゆう</small> 北口 美結 …… 4
公益社団法人青少年育成広島県民会議会長賞	
大きな思いやりの輪	尾道市立高西中学校 2年 <small>あむむらい おり</small> 栗村依緒里 …… 5
広島県中学校話し方連盟会長賞	
カメラの向こうに笑顔の輪	竹原市立吉名学園 9年 <small>おおした りな</small> 大下 莉奈 …… 6
国際ソロプチミスト広島会長賞	
私は「私」あなたは「あなた」	広島市立江波中学校 2年 <small>かわえ あおい</small> 川江 葵 …… 7
広島清流ライオンズクラブ会長賞	
一人一人の意識、思いやりの心	広島県立広島中央特別支援学校 1年 <small>たけむら しんご</small> 竹村 心吾 …… 8
優 秀 賞	
一歩進んだその先に	庄原市立西城中学校 3年 <small>ささき ゆい</small> 佐々木 結 …… 9
私の大好きな地域のために	三次市立塩町中学校 3年 <small>ふくだ やすこ</small> 福田 泰子 …… 10
今こそ～午前8時15分によせて～	広島市立瀬野川中学校 3年 <small>くぼ あかり</small> 久保 灯里 …… 11
優 良 賞	(発表順)
おじいちゃんに教えてもらった大切なこと	山陽女学園中等部 3年 <small>ささき もも</small> 佐々木萌百 …… 12
ローカル線を存続させるために	三次市立甲奴中学校 2年 <small>しげおか こうたろう</small> 重岡幸太郎 …… 13
言葉の壁を越えて	広島県立広島中学校 2年 <small>かとう わかな</small> 加藤 葉愛 …… 14
沖縄を想う	盈進中学校 3年 <small>あだち みさき</small> 足立 美咲 …… 15
私の髪	庄原市立庄原中学校 3年 <small>たぐみ みゆ</small> 田組 未悠 …… 16
きっとつながる、あなたの言葉	東広島市立磯松中学校 3年 <small>くろき</small> 黒木あかり …… 17
基準特別賞	(発表順)
今、私たちがすべきこと	広島市立高取北中学校 2年 <small>きよなが</small> 清永このは …… 18
○講 評	
審査員長 和田 晋	比治山大学非常勤講師 …… 19
○第45回「少年の主張」広島県大会・第57回中学生話し方大会開催要領	21
○審査員及び審査基準	23
○第45回「少年の主張」全国大会～わたしの主張2023～内閣総理大臣賞 受賞作品	
私が歩む夢への道	鳥取県米子市立東山中学校 3年 <small>やびき みらい</small> 矢曳 未来 …… 24

「家庭の日」に関する目次

特選（広島県知事賞）

●作文の部

心から出た応えん	東広島市立御園宇小学校	6年	堀田佳菜子	25
家族が増えて	三次市立塩町中学校	1年	黒瀬小春	26
母が不在の日	東広島市立西条中学校	3年	橋本夢叶	27

●図画の部

おとうさんとぼくがしょうぎをしているよ。	尾道市立久保小学校	1年	宮本泰志	46
----------------------	-----------	----	------	----

入選（公益社団法人青少年育成広島県民会議会長賞）

●作文の部

かっこよくてやさしくてしっかりもの	三原市立糸崎小学校	1年	岡野真拓	28
おじいちゃんとおぼく	竹原市立竹原西小学校	2年	岡本琥雅	29
思い出のつまった通学路	竹原市立竹原西小学校	3年	馬場陽菜	30
二人三きゃくでがんばった全国大会	竹原市立竹原西小学校	4年	井手元稔	31
まほうの言葉	広島市立井口小学校	4年	玖村桃	32
5本の矢	東広島市立西条小学校	6年	松本樹実	33
幸せ	広島県立三次中学校	1年	浦谷優菜	34
私にできること	呉市立白岳中学校	1年	保手濱夏実	35
思い違い	尾道市立美木中学校	2年	上實千紗	36
家族に感謝	三原市立大和中学校	2年	新原悠真	37
父への思い	呉市立東畑中学校	2年	高橋瑠那	38
曾祖母との思い出	三次市立塩町中学校	2年	谷川優華	39
妹の応援のすごさ	東広島市立松賀中学校	2年	堀田倅希	40
みんなでご飯	三原市立久井中学校	2年	宗岡美來	41
気持ちを込めて	福山市立新市中央中学校	3年	市川心雪	42
あーそーぼー！	三次市立吉舎中学校	3年	白附朋華	43
大好きなおばあちゃん	三原市立宮浦中学校	3年	森田野乃花	44
話せなくなっても	東広島市立松賀中学校	3年	山本葵里	45

※他に三原市立大和中学校に受賞者がおられますが、本人の希望により掲載を控えさせていただきます。

●図画の部

夏のフルーツを妹とたべてるところを書いた	広島市立東浄小学校	2年	内田さら	47
かぞくでプールでおよいだよ。	東広島市立御園宇小学校	2年	廣光彩羽	47
家族みんなでセミとりをして、楽しかった。	福山市立西小学校	3年	坂口葉椰	47
かぞくでとうきょうタワーにいった。	東広島市立御園宇小学校	4年	佐川仁望	47
暑い夏家族とした流しそうめん最高の思い出	広島市立戸坂小学校	5年	三分一陽	47

令和5年度「家庭の日」作文・図画募集要綱	48
----------------------	----

審査員及び審査要領	49
-----------	----

令和5年度応募校一覧	50
------------	----

「少年の主張」・中学生話し方大会 2023

日時：令和5年9月2日（土）10：00～14：30

場所：広島県社会福祉会館（広島市南区比治山本町 12-2）



集合写真



大会開始前の会場



審査委員・会場風景



主催者及び来賓登壇



表彰式の風景

発表者一覧



基準
『今、私たちが
すべきこと』

広島市立高取北中学校

2年 清永このは



2番
『おじいちゃんに教えて
もらった大切なこと』

山陽女学園中等部

3年 佐々木萌百



3番
『私は「私」
あなたは「あなた」』

広島市立江波中学校

2年 川江 葵



4番
『ローカル線を
存続させるために』

三次市立甲奴中学校

2年 重岡幸太郎



5番
『一歩進んだ
その先に』

庄原市立西城中学校

3年 佐々木 結



6番
『言葉の壁を越えて』

広島県立広島中学校

2年 加藤 葉愛



7番
『大きな
思いやりの輪』

尾道市立高西中学校

2年 栗村依緒里



8番
『沖縄を想う』

盈進中学校

3年 足立 美咲



9番
『一人一人の意識、
思いやりの心』

広島県立広島中央特別支援学校

1年 竹村 心吾



10番
『私の大好きな
地域のために』

三次市立塩町中学校

3年 福田 泰子



11番
『私の髪』

庄原市立庄原中学校

3年 田組 未悠



12番
『今こそ～午前8時
15分によせて～』

広島市立瀬野川中学校

3年 久保 灯里



13番
『まずは地域から』

尾道市立日比崎中学校

3年 北口 美結



14番
『きつとつながる、
あなたの言葉』

東広島市立磯松中学校

3年 黒木あかり



15番
『カメラの向こうに
笑顔の輪』

竹原市立吉名学園

9年 大下 莉奈

1番 欠席
『目標のその先へ』

坂町立坂中学校

2年 埜 花音



まずは地域から

尾道市立日比崎中学校

3年 北口美結

先日、G7サミットが広島で開催されました。それを機に、広島県の食材に国内外から注目が集まっています。各国の首脳に提供された食事には、私が暮らす尾道のみかんやいちじくも使われていたそうです。生まれ育った尾道と世界とが食を通してつながったと聞いたとき、私は心躍る思いでした。しかしその一方で、以前から日本が抱えている、ある問題は解決されずにいます。それは、食料自給率です。現在の日本は食料自給率が他国と比べてとても低く、災害や紛争などで輸入が途絶えれば直ちに食料不足に陥ると懸念されています。私は、この状況を改善する必要性を強く感じており、そのためには、地域内のつながりを深めることが大切だと考えます。

私は普段から地元の食材を口にすることが多く、その中で二つのことを感じています。

一つは、「不揃い品」とよばれる食材もおいしく食べられるということです。私の祖父母は尾道で農業をしているので、畑でとれた野菜や近所の人にもらった魚を私の家まで持ってきてくれます。それらはどれも、形が悪い、傷がついている、小さすぎる、大きすぎる、など出荷できない理由があるものばかりです。私は何度か祖父母の畑を手伝ったことがありますが、収穫後には、出荷できるものとできないものを分ける作業をする必要があります。時には収穫量の半分以上が出荷できないほうに含まれることもあり、そのうちの一部は知り合いに譲りますが、残りは捨てなければなりません。しかしそれらはどれも、他と同じようにおいしいのです。私はそれらを口にし、おいしさを噛み締める度に、「これが捨てられてしまうのか」とやるせない気持ちでいっぱいになります。だから私は、もっと多くの人たちに「見た目は関係ない、おいしい」ということを知ってもらいたいです。さらに、それを実感してもらうためには、地域の中でのつながりをもっと深くする必要があります。そうすれば、地域の人から不揃いな食材を譲り受ける機会がより多くの人たちに訪れ、その味の良さに目を丸くする人の数も増えると思います。

もう一つは、地産地消の取り組みについてです。私は、広島県や尾道市の食材が多く取り扱われている、産地直送市をしばしば利用します。そしてそこで買う食材の虜になっています。その理由は、鮮度が良くおいしいことと、産地が明確で安心できることです。私は、地産地消の取り組みは、消費者と生産者の両方に笑顔をもたらすものだと思っています。消費者は新鮮で安心・安全な食材を選ぶことができ、生産者は輸送費を削減することができます。また、前半部分で述べた「不揃い品」の売買も行いやすくなると思います。実際に、不揃いな食材を低い価格で販売している様子は、他の店より産地直送市のほうが多く見られます。このような理由から、私は地産地消の取り組みを広げていきたいです。

国全体の問題である食料自給率の低迷、これを解決するために私たちにできることは、地域での生活にあると思います。地域の中でのつながりを深め、地元で生産された食材や本来は出荷できない食材を選択することは、私たちが身近に行える取り組みの一つだと思います。私はこれらを実行し、呼びかけることで、本当の意味で世界に誇れる、尾道、広島、日本にしていきたいです。



大きな思いやりの輪

尾道市立高西中学校

2年 栗村 依緒里

「これはどうやったらええのかねえ」

私が友達と一緒に、電車で遊びに出かけたときのことです。駅の券売機で私が切符を買っているとき、となりで切符の買い方が分からず、困っているご年配の男性がいました。

声をかけようか迷っていたその時、小さい頃の出来事をふと思い出しました。それは、家族で野球観戦に行ったときのことです。父と手をつないで歩いていると、ご年配の夫婦が、ゆっくり階段を降りているのを見かけました。ご主人は足が悪い様子で、階段を降りるのを難しそうにしていて、奥さんがフラつきながら支えようとしていました。それを見た父は、すぐに二人に近づいて優しく声をかけました。

「大丈夫ですか。手伝いますよ。」

目の前で見た父の優しさに、心が温まるような、そんな気持ちになりました。

思い出したとたん、私は男性に声をかけました。上手く説明できるかどうかは分からないけれど、役に立ちたいと思いました。

「どこまでですか？」

男性はすぐに行き先を答えました。私は切符の買い方を説明しながら、ボタンを押していきました。

「ありがとね～」

無事買い終わると、男性の安心したような声が聞こえました。その声を聞いて、私もほっとしました。できればホームまで案内したかったという反省もありますが、父のように役に立てたことが嬉しかったです。

知らない人に声をかけることは勇気がいることです。今回のように最後まで見届けることができないこともあります。けれど、人が困っているときは、自分が人のために役に立てるのなら、何かしたい、誰かに助けられたときは、「ありがとう」と心をこめて言いたいです。ありがとうと言われると、役に立てたことが嬉しいと思えるし、次も勇気を出して行動しようと思えることができます。すると助ける、助けられるの繰り返しになり、それは一人一人が意識するとどこまでも広がります。思いやりでつないだ縁がどこまでも伸びてゆく。だから私は、父のように自然と声をかけられる人になりたいです。

私の将来の夢は、はっきり決まっていませんが、自分ができることを人のために役に立てたいと思っています。私は絵を描くことが好きで、小さい頃から絵を描いています。最近では、先生に描いてと頼まれ、学校のポスターを制作しました。その時は役に立てたことが嬉しく、やってよかったと感じました。けれど、もっと自分の力を伸ばせば、もっといろいろな人のためになるのではないかと考えるようになりました。例えば、何かのデザインをし、誰かに喜んでもらえたなら、それが私にとってやりがいにつながると思います。

人のために勇気を出すことは簡単ではありません。けれど、今まで自分のために何かをしてくれた人のことや、誰かの思いやりを身近に感じた時、それが勇気となり、きっと今の自分を動かすでしょう。恩返しではなく、別の人へつないでゆくバトン。それがきっと大きな思いやりの輪になってゆくと 생각합니다。



カメラの向こうに笑顔の輪

竹原市立吉名学園

9年 大下 莉奈

「黙食にご協力ください。」「食事中はしゃべらないで。」

この数年間、耳にタコができるほど聞くようになった言葉です。給食の時間にはじめて先生に言われたとき、「楽しく話しながら食べたいのに」とすごく残念に思ったことを鮮明に覚えています。

食事時間は楽しいのが当たり前で、誰かと会話をするのも当たり前。農林水産省のホームページにも、「食事はその日の出来事を話し合ったりするコミュニケーションの場としても重要です。」とあります。私の思い出の一つには、仲の良い友達と緑の木の下に集まって、それぞれがそれぞれのお弁当を持ち寄って昼食をとった小学生の頃の遠足があります。みんなと円になって座り、楽しい会話をしながら食事をしました。しかし、それは新型コロナウイルスによって当たり前ではなくなっていました。

学校や職場に限らず、プライベートでも、マスクの着用が義務化されたり、飲食店や学校の給食時間に黙食が求められたりするようになりました。スポーツジムには「黙トレ」、カラオケ店には「黙カラ」といった張り紙も貼られていました。世の中では黙っていることこそが正義という風潮が高まっていきました。そんな中で楽しくおしゃべりをしながら和やかに食事をするという行為は全くできなくなってしまいました。

ここ数年、吉名学園でも給食が黙食になっていました。食事中に会話をするのができず、私を含めみんなしんどかったし窮屈で退屈でした。

黙食でも楽しく食事がしたい。そのために吉名学園で始まったのが給食中の学園放送です。最初は流行りの音楽を流したり、紙芝居や絵本の読み聞かせをしたりするなど、先輩方が手探りでいろいろなこと挑戦していきました。そのおかげで、少しずつ食事が楽しくなってきました。先輩方が必死で学園を盛り上げようと頑張っている姿に「いつか私も学園放送で学園全体を笑顔にしたい」という思いが芽生え始めました。

そして、9年生になった今、今度は私がその吉名学園の学園放送を頑張っています。

感染症対策の必要性が薄れてきた現在、児童生徒が楽しめる放送になりつつあります。今、いろいろなアイデアを出し合って放送を練っています。

「ここで都道府県クイズです。カキやレモンが有名な都道府県はどこでしょう。正解は広島県です。」

このように、クイズを出題したり、先生を招いた面白いトーク番組。学園放送を見たら笑顔の輪が広がるように仕組んでいます。でも、まだ満足していません。

今まで一方通行だった放送。これからは、双方向でお互いの壁を超えて、学園にいるすべての人たちのコミュニケーションの輪が広がるような放送にしていきたいです。だからこそ、今まで以上に新しく、楽しい放送を作っていきたいと思っています。

では、最後に私達の学園放送と同じ終わり方で締めようと思います。ここで一句。

「アイデアで カメラの向こうに 笑顔の輪 みなさん、ごきげんよう。」



私は「私」 あなたは「あなた」

広島市立江波中学校

2年 川江 葵

「女の子なのに」

これは、私が小学6年生の時に見ず知らずの人に言われたことです。男の子っぽい服を着ていたら、「女の子なのに」と言われました。私はその時、「女の子ってなに」、「女の子はこういう服を着たらだめなの」ともやもやしました。中学生になって着る制服は、ズボンとスカートを選ぶことができました。そのなかで私はスカートを選びました。その理由は、周りにどう思われるかがこわかったからです。そして、また「女の子なのに」と言われるのが嫌だったからです。1年経った今では、ズボンも良いと思っています。実際校内に女の子でズボンをはいている人をよく見ます。その逆で男の子がスカートをはいているのは見たことがありません。でも、もし男の子がスカートをはいていたとしても、女の子がズボンをはいていることと同じで私は何にも思わないと思います。ところで、男女の格差と聞いたら、職場での差別や偏見などを想像するかもしれませんが、中学生の私たちの中でも、そのようなことが多くみられます。

では、具体的に社会ではどのような男女の格差があるのか調べました。よく耳にするのは、「議員の割合は男性の方が多い」、「長とつく役割は男性が担っている」というようなことです。その他にも「男性は働いて女性は家事をするべき」、「女の子はスカートをはいて当然」というようなことが見られます。

なぜこのような格差が起きるのか原因を調べました。調べてみると、「男女の役割分担についての社会通念・慣習・しきたりなどが根強いから」、「仕事優先・企業中心の考え方が根強いから」などの原因が見られました。生物学上の役割の違いが、平等になるべき場面にまで影響しています。また、国によっては伝統的な風習や文化が原因で格差が見られることもあります。

次に格差が起きる原因を私なりに考えてみました。「男はこうである」、「女はこうである」という固定観念に捉われているからだと思います。私たち子どもの固定観念は、周りの友達、大人に言われて、その考え方はふつうであると思いこんでしまうことから生まれているはずで

す。男女格差が起きないために私たちが今からできることはなんでしょうか。まず、ジェンダー平等についてよく知り、理解することが大切です。また、性別に捉われることなく、相手のことを知ることの一つのできることではないでしょうか。実際、私の知り合いに、同性同士でお付き合いをしている人がいたので、その人に話を聞きました。その人は「付き合うのに男も女も関係ない」と言っていました。私も「確かに」と共感しました。私自身、性別は関係ないはずなのに、男子は違う考え方をしていて決めつけてしまうことがありました。私はもっと異性と話をしたり、友達と話をしたりして、相手のことをたくさん知ってあげたいなと思っています。そうして相手の意見を尊重し、行動や言動を制限しないことが大切だと考えます。さらに私たちの次の世代に向けて、色々な価値観があり、色々な人がいるということ、相手に性別を押し付けてはいけないということなどを私たち自身が伝えていくべきなのではないでしょうか。

私たち中学生でも、できることからやっていきませんか。受けつがれてきた固定観念は私たちの世代で終わりにしましょう。

私は「女子」である前に「私」です。あなたも「あなた」ですね。私は、私を愛したい、自分を楽しみたい。私は「私」を見てほしい、あなたも「あなた」を教えてくださいませんか。

広島清流ライオンズクラブ会長賞



一人一人の意識、思いやりの心

広島県立広島中央特別支援学校

1年 竹村心吾

わたしには視覚障害があります。視力は、右目は光を感じるぐらいで、左目は0.06ぐらいです。視野も狭いのです。だから特別支援学校に通っています。学校には普段、電車とバスを使って自力で通っています。自力通学の時は白い杖「白杖」という視覚障害があることを周りに伝える物を持っています。この自力通学は小学5年生の時から始め、今ではすっかり慣れました。慣れはしましたが、自力通学にあたって、二つの大きな問題に直面しています。

一つは、電車やバスの車内でのことです。車内が混んでいて席に座れない時に、席をゆずってくださる人がいます。たまに遠りよしてしまうこともあります。ゆずってもらった時は必ず「ありがとうございます。」と言うようにしています。でもほとんどの人がわたしのことに気づかないのか、ゆずってはくれません。そうすると立ったままになります。視覚障害があるのに立ったままになると、何が困るのか想像できますか？つり革や、つかまるための棒の位置が見つけれず、ゆれにたえられず転んでしまう。そしてもっと目の見えない人は、人にぶつかってしまう恐れもあるのです。もう少し、わたし達視覚障害者の存在を意識してほしいと思います。

もう一つの悩みは、白杖を使って点字ブロックの上を歩くときです。点字ブロックの上を目の見える人が歩いていたり、点字ブロックの上に自転車が止めてあったりします。中でもわたしは、点字ブロックの上を目の見える人が歩いているところによく出会います。ほとんどの人が、わたしが近づいていかないとよけてくれません。それだけではなく、点字ブロックの上や周りを、自転車が横に並んで速いスピードで走っていることもあります。実際、わたしが点字ブロックの上を歩いている時、すぐ横を自転車が速いスピードで追い越していったことがあります。あと一、二歩横にずれていればぶつかりそうでした。あの時はびっくりして心臓が止まるかと思いました。本当に怖かったです。

点字ブロックとは、視覚障害者が安全に歩くための道です。わたしのように少し見えていれば、人や物をよけられることもありますが、全く見えない人は、点字ブロックと白杖だけが頼りなのです。白杖が人や物に当たるとそれをよけようとして進行方向が分からなくなってしまふことだってあるのです。本当に困るし、怖いことです。それに、白杖が当たったら相手も危険です。相手もけがをしてしまうかもしれません。止めてある自転車を倒してしまうかもしれません。ぶつかるとお互い影響があるのです。

どうしてこのようなことが起こるのでしょうか。それは、白杖や点字ブロックなど視覚障害に関する興味・関心がうすいこと、これらのことに限らず、一人一人が周りのことに意識を向けていないことが原因だと思います。この問題を解決するには、一人一人の理解と努力が必要です。視覚障害について理解を深めてほしいのです。その上で、どうすれば視覚障害者が安心・安全に過ごせるか考え、行動してもらえると嬉しいです。少し意識を向けてくれるだけでも嬉しいです。もちろん、気になること、分からないこと、本当の気持ちなどを聞かれたら、できるだけ詳しく伝えるつもりです。ぜひ聞いてほしいと思います。

このことは決して視覚障害者だけに限ったことではありません。「一人一人の意識」は他の障害者の悩み解決にもつながるはず。一人一人がお互いのことを意識すれば、たくさんの人に「思いやりの心」が芽生えるはずなのです。わたしは、思いやりに満ちた、誰もが安心できる世界で暮らしていきたいと思っています。



一歩進んだその先に

庄原市立西城中学校

3年 佐々木 結

私は中学校で3年間野球をしています。

そう聞くと、小さい頃から野球をしてきた運動好きな子だと思われるかもしれませんが。しかし実際の私は、運動するのは大嫌いで、スポーツなんて見るだけで十分と思うような子でした。そんな私が中学校入学を機に選んだのが、これまで一度もやったことのない野球。チームでたった一人の女子。それもチーム創部初の女子選手となりました。

そのきっかけは、中学生になる直前。知り合いの保護者の方に「うちの野球の試合を見に来てよ。」と声を掛けられたことでした。野球を見ることは好きだったので、軽い気持ちで見に行くことを決めました。そして試合の日、同年代の子が広いグラウンドで、全力で野球をしている姿がそこにはありました。その姿に引き込まれ、憧れとワクワクがあふれてきて、私も野球がしたいと強く思いました。そこから私の野球人生が始まったのです。

しかし入部後は当然、苦勞の連続でした。基本のキャッチボールもままならない、バットを振れば空振り、守備練習ではトンネルばかり…。練習自体についていけませんでした。特に冬の基礎練習は辛く、男子と同じ筋トレや長距離走、長い階段ダッシュ…。次の日に動けなくなる程の筋肉痛になりました。あんなにワクワクした自分と実際の自分。理想と現実のギャップに「何で野球なんて始めたのだろう」と何度も心が折れかけました。

そんな中で2年生になり、私とは違い野球歴の長い同級生は、どんどんスタメンで試合に出場するようになりました。悔しかったけれど、私はチームの為に、ベンチからでも声を絶やさず出そうと心掛けました。そんなある日、試合後のミーティングで監督が「今日試合に勝てたのは結の声のお陰だ。」と言ってくださいました。この言葉は、私もチームに貢献できているんだと気付かせてくれました。そんな私が2年生で初めて出場した公式戦。なんとスタメンに選ばれました。ただその時はスタメンで試合に出られる嬉しさ以上に、ミスして迷惑をかけてしまうかもしれないという不安でいっぱいでした。

緊張の第一打席。ランナー三塁のチャンス。投げ込まれたボールに、私は無我夢中でバットを振りました。打った打球はぼてぼてのショートゴロ。でも、その間にランナーが帰って1打点。私がチームにプレーで役に立てた瞬間です。そして次の打席では、何とレフト前にヒット！公式戦初ヒットでした！「打てた！」という嬉しさが体中を駆け巡りました。ベンチを振り返ると、「よっしゃ〜。」「ナイバッチン」の声と共に、みんなの喜んでる顔が私の目に飛び込んできました。今でも思い出す最高の瞬間です。

3年生になり、引退の時期が近づいています。私がここまで続けてこられたのは自分の力だけではなく、入部する時快く受け入れてくれた先輩や監督、コーチ、そして休みの日や朝早い日も支えてくれた母がいたからです。これらの支えのお陰で3年間続けられました。

私がもしあの時、野球をすることを決断していなかったら、どうなっていたんだろうと考えます。自分で選んで一歩進んだからこそ、その先には知らなかった世界が待っていました。自分で前向きに選択し、努力し続ければ、たくさんの出会いや感動が待っていることも知りました。この経験を活かし、私はこれからも自分で考え、判断し、それをやりきっていきます。

今、私は自信を持ってこう言えます。私の野球人生に後悔は少しもありません。野球をしてきてよかったです！



私の大好きな地域のために

三次市立塩町中学校

3年 福田 泰子

「今日の三次市の感染者数は193人。昨日と比べ15人増加しています。不要不急の外出は控えましょう。」

この数年間、何をするにもコロナのことを気かけながらの日々でした。様々な行事の中止。規模の縮小。いつまでこんな退屈な日々が続くのだろうかと、うんざりしていました。マスクを外し、みんなと笑い合えることはもうないのだろうか。地域の人と話すこともなくなってしまふのだろうか。人と関わることが好きな私は、そんな不安を抱えていました。

今年度に入り、やっと「日常」が戻りつつある今、考えていることがあります。それは地域とのつながりについてです。運動会や学習発表会、ふるさと祭り。できなかった行事を思い出してみると、私の生活にはいつも地域とのつながりがありました。

私の住む和田地域ではお正月にとんどをします。みんなでとんどの火を囲み、豚汁を食べながら1年間の無事を祈ります。

「あっ。ゆあちゃんの書き初め、一気に燃えたね。」

「私のは、車の上に飛んで行った。」

などと笑い合ったり、近況を話し合ったりと地域の人たちとの大切なふれあいの場です。今年のとんどは久しぶりに行われたくさんの人に声をかけてもらいました。

「やっちゃん広報に載ったね。ピアノ頑張るとるんじゃね。全国大会行くんじゃろ。うちの地域の誇りじゃ。応援しとるよ。」そう言って横断幕まで作っていただきました。地域の人はいつも私を温かく見守り、活躍を共に喜んでくださいます。

また川本のおばちゃんは、コロナが明けると美味しいものを届けてくれるようになりました。おばちゃんの作る料理は私の元気の源で、私は家族の分までべろりと食べてしまいます。

「おばちゃん、なんで孫もたくさんおるのにいつも作って持って来てくれるん？」

「なんぼしんどくても美味しい美味しい言うて食べてくれるけえ、また作って持って行ってあげたい思うんよ。やっちゃんはよく挨拶してくれるしねえ。孫もやっちゃんも皆地域の子よ。」

その言葉に私はハッとさせられました。相手のことを思って支え合える、共に喜び笑い合える。まるで家族のように思ってくれる地域の温かさに改めて気付き、これを絶やしてはいけないと思ったのです。

これまで地域の人から笑顔と愛情をたくさんもらってきました。コロナ禍では気持ちが沈むことも多かったけれど、逆に地域の人とのつながりの大切さを学ぶこともできました。私が好きなことは、やっぱり人と関わることだということも改めて認識できました。これからは、育ててくれた地域の人へ私が恩返しをしていく番です。今すぐできることと言えば、地域の人とたくさん話すことです。今月には敬老会があり、そこで私は吹奏楽の演奏を披露します。みなさんが喜んでくださるようになると思うと練習にも力が入ります。

私には空港で働くグランドスタッフや学校の先生など、いくつかの夢があります。将来どんな仕事に就いても周りの人を元気にし、地域の人や関わりを大切にしようと思います。コロナ禍で途絶えた人との関わり。その大切さをいつも、心にとどめておきたいです。



今こそ～午前 8 時 15 分によせて～

広島市立瀬野川中学校

3年 久保 灯 里

「午前 8 時 15 分は毎朝やってくる」これは国語の教科書にある、石垣りんさんの「挨拶」という詩の一節です。この言葉は 78 年前と同じ悲劇がいつ起こってもおかしくないと訴えています。今ニュースではウクライナのこと、ミサイルのことが連日のように報じられています。この詩の訴えがまさに現実になろうとしているのです。そんな中、5 月には G7 広島サミットが開かれました。今こそ、私達は考えるべきことがあるのではないのでしょうか。

私の祖父は 4 歳の時に被爆しました。爆風で窓は割れ、祖父は床に打ちつけられてしまったそうです。でも本当に衝撃だったのはその後でした。「水をくれえ」皮膚がただれた状態の人が何人もそう言いながら苦しうに水だけを求めて家の前の道を歩き回っていたそうです。その姿は私達の想像をはるかに超えるものだったのでしょうか。15 歳の私がとうに忘れた 4 歳の頃の記憶をこんなにも鮮明に覚えている。それほど原爆は祖父にとって衝撃的で悲惨なものだったのだと思います。

「忘れようにも忘れられん」と祖父は言います。「二度と起こしてはいけん」そのためには「伝えんといけん」無意識のうちにそう考え、「忘れられん」記憶になったのではないかと思います。

はがれた皮膚をたらししたまま歩く人々。

「水をくれえ」と苦しうに助け求める声。そんな光景を今でも私は想像できないし、信じることができていません。しかし、私達は伝えていかなければなりません。伝えていくことで、たとえ想像できなくても、信じきれなくてもそんなことは二度とあってはいけなないと「知る」ことはできます。「わかる」ことはできます。そして、それが平和を「誓う」ことへもつながるのです。私は祖父が被爆した被爆三世です。そして、文章を書くことが好きです。これは私に平和を訴えろというメッセージなのかもしれません。

そこで私から一つ提言したいことがあります。それは「全国で 8 月 6 日を登校日として平和学習をすること」です。広島に住む私達には当たり前ですが、全国的にはそうではありません。横浜に住む私のいとこは 8 月 6 日のことすら知りませんでした。登校日にすれば子供達が学校で原爆について「知り」平和について「わかる」ことができます。平和を「誓う」ことだってできるかもしれません。登校日はそのための、大きな機会となります。将来を担う、子供達にとって原爆や平和について「知る」「わかる」機会をつくる必要があるのではないのでしょうか。

今年 5 月には G7 広島サミットが開かれました。私達は改めて平和について考えることができました。このように機会があれば、平和について知り、考えることができます。祖父から原爆の話聞いたこと。8 月 6 日登校して平和学習をしていること。私には機会があります。このように皆にも機会をつくれれば平和について知り、考えることができるのです。G7 広島サミットも登校日もその一つです。

「午前 8 時 15 分は毎朝やってくる」今こそ、私達は考えるべきです。



おじいちゃんに教えてもらった大切なこと

山陽女学園中等部

3年 佐々木 萌 百

おじいちゃんに「すごく恥ずかしかった。やめてよね！」と私は言ってしまったことを今でも後悔しています。いつも口うるさいおじいちゃんが嫌いだと思っていました。「口を閉じて食べなさい。」一粒でも米粒が残っていたら、「最後まで食べなさい。」「声を出して挨拶をなさい。」幼稚園の頃から言われ続けていた私は、おじいちゃんが苦手でした。

小学生の時には、おじいちゃんはお小学生を見守るため通学路に毎日いました。1年生のある集会の日、周りの同級生が「あの人、緑のおじさんだ。」「毎日気持ちよく挨拶してくれる人だ。」とざわわしていました。みるとおじいちゃんが体育館に入ってきました。挨拶運動の先生としてきたおじいちゃんは体育館のステージで、大きな声で自己紹介し、全校児童に、挨拶のある町は犯罪が少ないという話をしました。私はおじいちゃんのそんな姿をなぜか恥ずかしく思い、うつむいてしまったまま授業は終わりました。一度も顔をあげられなかったその夜、「どうだ？ 今日のおじいちゃんかっこ良かったか？」と聞いてきたおじいちゃんに、「すごく恥ずかしかった。やめてよね！」と私は言ってしまったのです。おじいちゃんはただただ悲しそうな顔をして「ごめん」と小さな声で言ったことを覚えています。私は言い過ぎたと思いながら、素直になれないどころかイライラし、バツが悪くそれからおじいちゃんと必要なこと以外話さなくなりました。

2年生の12月終わり頃の寒い日の夜、父に「今から病院に行くぞ。」と言われて、訳の分からないまま病院に向かいました。病院につくと息をきらした母が私たちの元へ来ました。そして3人で病院のドアを開くと、ついこの前まで元気だったおじいちゃんが、ベットの上で目を瞑っていました。私は理解できず、言葉も出ず、ただ唖然としているだけでした。そして通夜があり、葬儀があり、火葬されて、はじめて、おじいちゃんはもういないと実感しました。私が経験するはじめての身近な人の死でした。それと同時におじいちゃんにもっと気持ちを伝えておきたかったと強く感じました。本当はありがとうっていっぱい言いたかったのに……。おじいちゃんが教えてくれたから、私は食事の時、注意されたことは一度もないです。挨拶もほめられます。きっとこれからも、おじいちゃんに教えてもらったことで私は何度もありがとうって思うはずです。でもおじいちゃんはいません。人はいつ死ぬかわからないことは分かっているつもりでしたが、感謝の気持ちを伝えられなかった私は中学生になった今でも後悔しています。だから、今伝えたいです。届いていると信じたいです。

おじいちゃん、ありがとう。大好きだよ。



ローカル線を存続させるために

三次市立甲奴中学校

2年 重岡 幸太郎

僕は鉄道が好きです。移動するときにはよく鉄道を使います。そんな僕は先日、三次市の JR 三次駅で職場体験をしました。鉄道に関わる仕事を体験することができ、充実した 3 日間を過ごすことができました。しかし、そこで僕は、この地域の鉄道が今、廃線の危機にあることも知りました。福塩線は広島県福山市の福山駅から三次市の塩町駅までを結んでいるジェイアールの鉄道路線です。僕の住む三次市甲奴町も通るこの路線は、全国で営業成績の向上に苦戦している路線として知られています。

営業成績の向上に苦戦している路線といえば岡山県新見市にある備中神代駅から広島市にある広島駅を結ぶ「芸備線」もそのひとつです。ある区間では 100 円の売り上げを得るのに 23,687 円もかかっているといえます。なぜここまで苦戦しているのでしょうか。その理由は単純で、鉄道に乗る人が少ないからです。僕の学校でも大半の人が鉄道に乗ったことがないといえます。

しかし、このまま鉄道を廃線の危機に追いやってしまってもいいのでしょうか。鉄道は古くから人々の足として活躍してきただけでなく、町の発展にも深くかかわってきました。今でも観光や買い物、通学の手段として鉄道を利用している人が少なからずいます。鉄道が廃線になればその人たちが困るだけでなく、地域は活力を失い、過疎化はさらに深刻になります。

そのような状況を打開するために、まずは鉄道に乗ってみることが大切です。この地域の鉄道には、「遅い」「本数が少なくて利用しづらい」といったデメリットが多く聞かれますが、その分メリットがたくさんあるという事実にも目を向けてほしい。

まず、鉄道はとてもエコな乗り物なのです。鉄道には、人が多く乗ればそれだけ一人当たりの温室効果ガスの排出を抑えられるというメリットがあります。つまり、みんなが移動に鉄道を使えば、自動車を使ったときよりかなりの温室効果ガスの排出を抑えられるのです。

また鉄道に乗れば、今まで知らなかった、地域のいいところを見ることができます。鉄道は線路を走るのだから、自動車で道路を走っているときには見られなかった新しい風景や豊かな自然を感じることができます。実際僕も、鉄道に乗って初めて知った甲奴の自慢できるところがたくさんあります。

さらに、鉄道を利用すると、移動している間に自由なことができるのも利点です。今まで自動車を運転していた時間を、読書や調べもの、睡眠にあてることができるようになります。これによって、時間を有効に使うことができます。

このように、鉄道を使うメリットはたくさんあります。こんなに素晴らしい鉄道がこの地域にはあるのに、利用しないのはあまりにももったいないと思いませんか。鉄道を通すのには高度な技術やたくさんの労力が必要になり大変ですが、廃線にするのは簡単なことです。しかし、鉄道が廃線になれば、そこから見られた景色や自然はもう二度と見られなくなります。だから、僕はみなさんに鉄道に乗ってもらいたいです。一人ひとりの行動が、この地球の未来を動かす鍵になります。「もう廃線の議論も出ていて今から行動しても無駄だ。」と言う人もいるかもしれませんが、僕はそうは思いません。先人の知恵と努力が詰まった鉄道という素晴らしい乗り物を、これからも永遠に残していきたいです。



言葉の壁を越えて

広島県立広島中学校

2年 加藤葉愛

私は先日、友達とフェリーで宮島を訪れました。昨年にも訪れたのですが、今年是一目瞭然で島にもフェリーにも外国人観光客の方々が増えていることを実感できました。

私達が宮島を訪れた目的は、外国人の方に英語で話しかけるとい、英語教室のミッションを達成するためです。

最初にそのミッションを告げられた時、今まで外国人に自分から話しかけたことはありませんでしたが、「話しかけるなんて楽勝だろう」と軽い気持ちでした。しかし、刻一刻とインタビューが近づくにつれて事の難しさに気付いていき、インタビュー直前には不安と緊張でいっぱいでした。「断られたらどうしよう。」「自分の英語が通じなかったり、相手の英語が聞き取れなかったりしたらどうすればいいんだろう。」等、次々に心配なことが浮かんできました。それでも、やらないと帰れないので、直前まで入念に計画を立て、「Excuse me.」

と声をかけると、外国人の夫婦が振り返ってくれました。私は、外国人と対話した経験があまりありませんでした。そのため、とても心配でしたが、英語の勉強のためにインタビューをさせてほしいと説明すると、その外国人の夫婦は快く「OK.」と答えてくださいました。

インタビューでは、「好きな日本食は何か？」等と質問させていただきました。そして、無事に終わった後相手の方と写真を撮らせていただきました。すると、相手の方にも、自分のスマートフォンでも撮ってほしいと頼まれ、外国人の方と気持ちが通じたようでとても嬉しく思いました。

そうして、アメリカやイングランド、フランス、ドイツ等数か国の外国人の方々にインタビューさせてもらうと、全ての方に共通していたと感じたことがありました。それは、相手が何を伝えようとしているのかを懸命に汲み取ろうとする姿勢です。時には、「時間がない」等の仕方がない理由でインタビューを断られることもありました。しかし、ほとんどの方は急に話かけられてもフレンドリーに対応してくださいました。また、質問にも丁寧に分かりやすく答えてくださいました。私達が分からない単語を使った時は、ジェスチャーで表現してくださり、とてもありがたかったです。

私達は、先ほど述べたように、インタビューの前はとても不安で、緊張していました。しかし、今になって考えてみれば、相手も、自分と言語の違う人達に急に話しかけられるのですから、私達以上に不安だったかもしれません。それにも関わらず、優しく対応してくださり、お互いに心地良いコミュニケーションをとることができました。

そして何より、インタビューに答えてくださった外国人の方々は心が温かく、私達日本人の中学生に親切に対応してくださいました。私はこのインタビューを通して、英語学習以外のことも学ばせてもらいました。

私は、この経験をきっかけに、言葉の壁について考えました。もちろん、現在の社会で、言葉はコミュニケーションをとる上で重要な役割を果たしています。

言葉があるからこそ互いをより理解し合えたり、仲を深められたりすることもあります。しかし、今回の私のように、言語の違う人同士でも意思を通じ合わせることはできるのです。

なぜでしょう。それは、お互いに相手のことを知りたいと思って接しているからだと考えます。相手のことを知りたいと思ったら、自然と相手の話を聞いているはずですよ。

これは、個人に限らず国同士の関係にも言えることです。私は今まで、文化や考え方、そして言語の違いによってすれ違ってしまったという話を何度も聞いてきました。もう少し互いの違いを認め合い、歩み寄ることができれば、少なからず改善されるのではないのでしょうか。言葉よりも何よりも大切なのは、お互いの思いを伝わらせる心があることです。

人と人との繋がりは、言葉にできるものだけが全てではありません。言葉の壁を越えれば、広い世界が待っています。

これからは、世界の人が進化する度に、立場の違う人を知ろうという気持ちがあるかを振り返り、より思いやりのある世界が築かれていくことを願っています。



沖縄を想う

盈進中学校

3年 足立美咲

2022年12月、私は沖縄へ修学旅行に行きました。沖縄の地で何を学ぶのか。それは、沖縄戦についてです。沖縄戦は、1945年の3月末から6月末にかけて沖縄本島を中心に行われた、日本軍とアメリカ軍の激しい地上戦です。沖縄は日本の防波堤とされ、多くの一般住民がまき込まれた戦争です。

私達は沖縄で、国籍や軍人、民間人の区別なく沖縄戦で亡くなった全ての人の名前が刻まれている「平和の礎」や、防空壕として使われた「ガマ」と呼ばれる自然洞窟など沖縄戦にまつわる様々な場所に訪れました。その中で私が特に気になったのは、「米軍基地」についてでした。米軍基地とはアメリカ軍が所有する軍事施設のことで、日本にあるものの内、約70%以上が沖縄に集中しています。

私が沖縄に関心を持ったのは、平和学習の中で佐喜眞美術館を訪れた時のことでした。佐喜眞美術館は「戦争」「生と死」などをテーマとして、丸木位里さん、俊さん夫妻の《沖縄戦の図》を常設展示している美術館です。私が注目したのはこの美術館が位置している場所でした。「ここ、宜野湾市にある佐喜眞美術館は普天間基地という米軍基地の土地の一部を取り戻して建てられた美術館である。」という説明を聞きました。その時、「沖縄の土地をアメリカから取り戻した。」という文言に違和感を覚えたのです。知識として、沖縄が地上戦で敗北し、アメリカに占領された時に基地が置かれた。やがて日本に復帰したが、日米安全保障条約に基づき基地は残ったというのは知っていました。しかし、どうしても沖縄の人々のための土地が他の国に使われているという状況が腑に落ちなかったのです。

佐喜眞美術館に行った日の午後、普天間基地が移転を予定している辺野古を遠くから見ました。沖縄の豊かで美しい海を埋め、基地を建てるための土地を作っている最中でした。移設の理由には、普天間飛行場のヘリコプターが建物に墜落したり部品が落ちたりしたことへの危険性が挙げられます。しかし、最も大きな理由となったのは1995年に沖縄県内で起こった米兵3人による少女暴行事件でした。これを契機に基地の返還が決まりました。米軍基地があることで日本を守れるという見方もありますが、先ほどのような事故・事件が起こったこともあり、基地問題は肯定派と反対派に分かれています。どちらにせよ、沖縄の自然と人々が脅かされている事実は変わらないのです。

私は、実際に沖縄で暮らす人々が基地問題をどのように考えているかが気になり、民泊先の読谷村の方に個人でインタビューをしました。その方は「米軍基地問題はアメリカと日本の問題である前に、沖縄と日本の問題なんです。だから沖縄だけではなく、自分の問題として考えてほしい。」ということや、「米軍基地があることに慣れてしまうのは、とても怖いことです。」と仰っていました。広島に暮らす私はこれまで、戦争の被害を受けた広島や長崎については学んでいても、沖縄戦や基地問題について学ぶ機会がなかったことに気づかされました。そして、どんな問題であっても自分の事として考える大切さと、疑問を持たなくなることへの怖さを痛感しました。

今の私に沖縄から米軍基地を失くしたり、辺野古移設の話を白紙に戻す力はありません。ですが、インタビューに答えてくださった方が、「美咲さんが沖縄に興味を持って沖縄を想ってくれているのが一番嬉しい。」と涙ながらに伝えてくれました。なので私はこれからも、米軍基地について調べ、学ぶことで沖縄を想い続けていきたいと思えます。

沖縄の人々が味わった辛さを完全に理解することは出来ないけれど、平和であることを諦めないように。



私の髪

庄原市立庄原中学校

3年 田 組 未 悠

私の髪の長さは今、80センチあります。小学校1年生から伸ばし始め、9年間、一度も切らずに伸ばし続けています。

皆さんは「ヘアドネーション」という言葉を知っていますか。病気や、不慮の事故などによって髪を失った子供達のための、医療用ウィッグを提供する活動です。しかし、はじめはヘアドネーションのために伸ばしはじめたわけではありませんでした。きっかけは単純で、テレビに出ていた女性タレントのロングヘアーに憧れたからです。

小学校3年生になった頃、叔母に「髪、伸びたね。寄付でもするん？」

と、話しかけられたことで、髪の寄付について興味を持つようになりました。

調べてみると、寄付できる髪の長さは、31センチメートル以上必要で、ロングヘアーのウィッグを作るためには50センチ以上の髪の毛が必要だ、ということがわかりました。更にロングヘアーのウィッグはショートヘアーより圧倒的に数が足りていないということもわかりました。すでに髪の長さが30センチあった私なら、あと数年もあればできるのではないかと考え、50センチを目標に伸ばし続けることにしました。

ロングの髪をきれいに維持するためにはたくさんの手間が掛かります。髪を洗うと乾かすのに50分はかかります。寝る時は髪に摩擦がかからないようにナイトキャップをかぶるなど、簡単なことではありません。夏の暑い時期にはもうバツサリ切ってしまうのが、と悩むときもありました。しかし、その衝動を押しとどめたのは、髪を伸ばしたくても伸ばせない子供達がいると思っていたからです。私の髪をその子供達に役立てたいというのが私のモチベーションになっていました。

しかし今、私の認識が変わり始めています。今年の春、ある記事に出会ったからです。ヘアドネーションを行っている「ジャーダック」という団体の代表理事、渡辺貴一さんのコメントが掲載された記事です。「髪がないという圧倒的に少数派である人達が、髪があることが当たり前である今の社会に、自分を寄せていかなければならない状況はおかしいのではないか。」という考えと、「ウィッグを提供する活動のドナー側の善意の部分しか伝わってなくて、使う本人の気持ちが置き去りにされている。」という内容でした。

私は今まで、髪を必要としている人に私の髪を寄付することがゴールだととらえていました。しかし、「髪の毛があることが当たり前」という社会の認識を変えていく考え方があるということに気が付きました。

もちろん、ウィッグを必要としている子供達のために、今年の秋に髪を切り、提供します。私は今後、使う人の立場を意識した活動をしていくつもりです。

以前よりヘアドネーションの認知度があがった現在は、「髪があることが当たり前」という社会の認識を変えていくチャンスなのではないかと考えています。少数派の人達が自由に選択を行える社会になれば、誰もが笑顔で過ごせる暖かい社会が実現するはずです。私のこの発表で皆さんの認識が少しでも変化したらいいなと思います。



きつとつながる、あなたの言葉

東広島市立磯松中学校

3年 黒木 あかり

その時、私はロンドンのヒースロー国際空港にいた。父の仕事の関係で、2週間ほどスウェーデンに行った帰りだった。レストランに入り、料理を決めて、隣にいた父はお店の方を呼んだ。しかしお店の方は来ない。聞こえていないのだと思った私は、父に「もっと大きな声で呼んでみたら？」と言った。けれど、何度手を挙げて、どれだけ声を出しても、私たちのテーブルに誰かが来ることはなかった。他の人のところには次々と行き、注文を受けているのに…。なぜ…。なんで…。私はただただ不思議でたまらなかった。私たちは何もしていないのに…。何も食べないまま、私たちは店を出た。席を立つとき、私は少し悔しかった。小学校3年生の時の出来事だったが、今でもはっきりと思い出せる。今考えると、アジア系の人に対する差別だったのかもしれない。

それまで、差別を近くに感じたことなど一度もなかった。けれど、そのことについて考えてみて、思ったことがある。それは、人は自分が思っているよりも、ずっと簡単に差別をしてしまうということだ。誰かを仲間はずれにしてしまうとき、その人を仲間外れにするか何分も考えるだろうか。差別は軽い気持ちで起こってしまうのかもしれない。一つの言葉、少しの行動だけでもそれは差別になりえる。だからこそ、自分の思っている以上に自分の発言、行動に気をつける必要があると思う。

では、どうすれば差別が減るのだろうか。私はある一冊の本を通して本当に大切なことに気付くことができた。それは、家の近くの本屋で見つけた葉っぱ切り絵アーティストの作品集だった。どの作品も葉っぱを細やかに切り抜いてあり、葉っぱの上には動物や植物、おいしいそうな料理、様々なものの形が見事に浮かびあがっていた。私は葉っぱの上のユーモラスな世界に強く惹かれ、優しい物語に心が温かくなった。このアーティストの方はADHDだそうだ。私は買ったばかりの本を母に見せた。

「この本ね、障害がある方の作品集なんよ。」

そう言った後、はっとした。そのアーティストの方について話すとき、「障害者」という一面から見て話していたことに気が付いた。人はたくさんの面を併せ持っている。感情、性格、見た目や話し方、肌の色、考え方、例を挙げたら挙げきれないほどの面を誰もが持っている。しかし、特に自分と違う一面を見ると、自分の気付かないうちにそのほかの一面が見えなくなることがある。人種の違いや障害の有無など自分と違う一面は様々だと思う。けれど、ただその一面のために不平等な扱いが起こるのは間違っている。だから、人の思考や人間性を決めつけないようにしたい。

私は小学校2年生の時、スウェーデンのインターナショナルスクールに通っていたことがある。外国から来ている人のための学校だ。まだ、あまり英語も話せなかったある日のこと。いつものようにランチルームに行き、昼食をとろうとした時に、友達の一部が大きな声で言ったのだ。

「いただきます！」

その時、そこにいた日本人は私一人だった。周りの人はきょとんとしていたがその友達は私を見るとにっこりと笑った。私の大好きな日本のことを理解しようとしてくれていることが心から嬉しかった。それと同時にありがとうという感謝の思いがこみ上げてきた。私が笑い返すととてもうれしそうだった。

自分の生まれた国のことを理解してもらえる。それだけでどれだけ幸せな気持ちになるだろうか。たとえ、その国の言葉が話せなくても、肌の色が違って、あなたの言葉や笑顔は相手の心に届く。人は違ってあたり前だけれど、みんな人間という同じ仲間だ。たくさんの一面があって、個性であふれている。それが人間なのだと思う。

笑顔で人と触れ合い、多くを語り、理解を深めていけばきっと新たな面が見つかるはずだ。気が付かなかったフィルターを取り除き、新たにその人を見つめたとき、生まれる差別は確実に減っていくと確信している。今度、海外の方に出会ったら、地域の方にするのと同じように、笑顔で「こんにちは」と挨拶してみたい。これから、私は様々な人と会おうだろう。その人のただ一面だけではなく、多面的に理解し、心を通わせられる、そんな人に私はなりたい。



今、私たちがすべきこと

広島市立高取北中学校

2年 清永 このは

「苦しそう。」「なんで?」「助けてあげたい。」私はそう思いました。

ある日テレビをつけると、ウミガメが呼吸をうまくできていなかったからです。

私はそのウミガメを見たとき心が締めつけられました。

ウミガメが苦しい思いをしていた原因は、海に流れ出たストローのごみでした。

ストローが口の中に詰まり、息がしづらくなっていたのです。

見たのはウミガメだけではありません。サメは、釣り糸や網などを飲み込んでしまい弱り、イルカは、クラゲと間違えてビニール袋を食べてしまっていました。

みなさんは「SDGs」という言葉を聞いたことはありますか? SDGsはこの地球で私たちが、暮らし続けていくために、2030年までに達成すべき17の目標のことです。

その中の14に「海の豊かさを守ろう」という目標があります。

さらに、この目標を構成する10個のターゲットがあり、海洋ごみの大幅な削減や海の生態系の回復などが定められています。

海には年間900万～1400万トンのプラスチックごみが流れ出ているといわれ、2050年には魚の数より、ごみの量のほうが多くなると予想されています。

私達が食べる魚たちにも被害が出ており、怖いのは、最終的に私たち人間に帰ってくるということです。プラスチックなどのごみを食べた魚をまた次の魚が食べ、その次の魚が食べるといった、食物連鎖の頂点にいるのが私たちです。釣った魚が汚染されていたら食べたくありません。ごみは海を汚し、海の生き物たちに大きな被害を与えます。

実際私が海に行った時も、たくさんのごみがありました。その時はプラスチックのごみ以外にも、ゴム製のものや、ガラスのものまでさまざまな種類のゴミがありました。「私たちはどのようにすればこの海を救うことができるのでしょうか?」

私はごみを減らすために、取り組んでいることが3つあります。

1つ目は、リサイクル出来るものはリサイクルすることです。例えば、食品トレーやペットボトルなどをスーパーの、リサイクルコーナーにもっていきます。

そうすることで、少しでもごみを減らすことができます。

2つ目は、プラスチックフリーな生活をするということです。そのために、ラップを使わずミツロウラップを使ったり、洗剤類は詰め替えをしたりして生活しています。

3つ目は、海に行ったときはゴミ拾いをしています。びっくりするくらい落ちていて、例えばビンやホース、発砲スチロール、中には外国の製品までありました。ガラスやカキの養殖に使われる道具などの細かいものも多いので、丁寧に拾っています。家に持ち帰ってからきちんと分別をしゴミの日にだしています。

このように一人一人が、日々の生活から、変えていく必要があるのです。

より多くの人々が持続可能な社会を目指し、「少しでも力になりたい」「守りたい」と思うことができれば、この地球はよりよい未来へとばたいていくと思います。

「地球を救う行動を起こすのは、今です!」

**審査員長**

比治山大学非常勤講師

和田 晋

皆さんに講評をお伝えします。11名の審査員で先程まで厳正に審査を行いました。

皆さんにとって今後の参考となりますように、良かった点と課題点について率直にお伝えしようと思います。

当初は基準発表に続き15名の発表を予定していましたが、今回都合がつかない1名が参加できず誠に残念でした。皆さんはそれぞれの地域や学校の代表として参加していただきました。一人でも多くの方の意見を聴きたいと審査員は心から思いました。

最初に基準発表をされた清永さんについて、審査員会において基準として実に安定感がある立派な発表だったと評価されました。この基準発表が、その後の14名の発表に火をつけ、続く皆さんが堂々と自信を持って発表をできるようになった点で基準発表者に心から拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。

その基準発表に続いて14名に発表していただきました。まず良かったことを2点に絞ってお伝えします。

1つ目は、それぞれ県内各地からの出場があり、いろいろな学校や地域の事情もあると思いますが、学校の様子だけでなく地域の様子、そして自分の個人的な体験を含めて、自分の周りの特徴を上手くまとめて発表していただきました。これが県大会の醍醐味であり素晴らしさであると思います。審査員は色々な所に住んでいますが、皆さんの意見を聞いて地域を越えて発見がありました。「コロナが収束しつつあるが、皆さんはとても積極的な生活をし自分の考えを持っている」ことに、大いに元気をいただきました。14名の発表に優劣をつけること自体が難しく、今年はハイレベルな発表であったということをお伝えし高く評価します。

2つ目に、当初はコロナ感染やウクライナ戦争など現在騒がれている様々な話題がたくさん出てくるかと予想しましたが、そこを扱うのではなく、自分自身の体験や身近な体験をくぐらせて、皆さん自身が社会への目を開いているところを審査員は高く評価しています。もちろん社会の個々の事実について目を向けて論ずることは大事です。しかしながら自分の身近な体験を大事にしながら自分らしく自分の身体を通して考えることはさらに重要なことです。その点で自分の身近な体験を通して自分の考え方や意見を発表くださった点を評価し敬意を表したい、これが審査員一同の一致した思いです。

特に、発表の中に「G7サミット」や、地域のとんど祭り、あるいは宮島での英語の研修など、実に多様な話題が提供されました。そこには自分の体験をくぐらせたからこそ生まれた人を引きつける魅力が付け加わりました。以上の2点を審査員会は高く評価しています。

続きまして課題点についてやや厳しい点も含めてお伝えします。この大会に参加した先輩の中にはこの広島県大会から全国大会に出場した人もいますし、今や世界に羽ばたく平和大使のような働きをして活躍している人も輩出しています。皆さんはこの後の成績発表にこだわるのではなくて自分自身がこれからの生き方を大切に、自分に誇りと自尊心を持っていただきたいと心から期待しています。その観点から今日の発表を聞いて「こういう点を工夫したらもっと良くなる」ことについて、審査員会で話し合われたことを4点に絞ってお話しします。

まず1点目について、「話し方に差がある」ということです。特に注意していただきたいのは、「自分の思いを伝えたい」という自分の強い思いが色々な身振りや表情に表れることです。アナウンサーがニュースを伝えるときの場面を思い出してみてください。アナウンサーが手を動かし大きな身振りで事実を語ることはありません。この話し方大会で一番大事にしていきたいのが、言葉の力

です。言葉の表情です。言葉の使い方であり、言葉の選び方です。中学生である皆さんに今一度考えてみていただきたい。間の取り方や強弱など、少し工夫することによって、もっと生き活きとした発表に高まります。内容面は素晴らしいが、「話し方を工夫したらもっと高い評価になった」という声がありました。

2点目に、「タイトルの付け方」をさらに工夫してほしいと思います。タイトルを見たら皆が「ん？」これはどういう発表だろうかと聞く人を引きつけてください。短いタイトルでも長いタイトルでも相手意識に立って、聞く人がどう受け止めてくれるだろうかと考えてください。皆さんは3,006名の応募者の中から審査を重ねてここに至りました。一次審査・二次審査とも、標題やタイトルが大きな力を持ちます。今後皆さんがいろんな文章を書いたり話したりするときに「タイトルのつけかた」についてもっと工夫をしていただきたいと思います。さらなるポイントはタイトルだけでなく、みなさんの発表に論理が一貫しているかどうかという点です。「前半はいいけれど、後半がちょっと息切れでしたね」、「どうして急にこんな話に変わってしまうのか」という声もありました。自分が付けたタイトルに始まり前半から後半に向けて意見を一貫させて、タイトルから最後の一言まで皆をしっかり引きつける論理展開を期待します。

3つ目に、「社会とのかかわり方」を自らの体験を通してもっと自信をもって発表していただきたいことです。先に審査員会では皆さんの身近な体験をくぐらせて発表していることが素晴らしいと評価しました。今後の課題はその身近な体験から社会参画したときに、自分の学校、社会、地域においてどのような生き方をするのかになります。その展望・ビジョンをもつために自分自身の生き方について積極的かつ真剣に考えて続けてもらいたいと心から願っています。

4点目は、「相手意識に立った発表」をこれからも徹底して考えることです。審査員の中にアナウンサーがいらっしゃいますが、その方の助言がとても象徴的でした。「真剣に必死に話すことはいいけれども、できればその思いを押さえながら自然に相手に思いが伝わる、そのような話し方を工夫してもらいたい」ということです。特に、これは発表者、さらには指導なさる学校の先生方あるいは保護者の方々にお願いすべきことかもしれません。迫力で押す発表は聞いている方も緊張してしまいます。「相手が一番聞きやすく理解しやすい」、そういう話し方はどのような話し方だろうかと考えてみてください。皆さんにはもっと自信をもって話し方そのものをさらに工夫していただきたいと思います。また、「言葉そのものが本当に適切かどうかを吟味してほしい」という声もありました。具体的には、例えば「知る」と「分かる」は同じ意味でしょうか。「その使い分けがきちんとできていないために論理展開がシャープにならない発表もあった」との声がありました。私たちは言葉を選択しながら話していますが、相手にわかるように伝えるためには言葉をもっと選びこんで丁寧に伝える必要があるのではないのでしょうか。今回参加された皆さんに期待するがゆえに審査員を代表してお伝えしました。

私個人の思いですが、この話し方大会を経てこの厳しいステップを越えた人は、各自がそれだけの力をお持ちですし、その力を自分の生き方に反映していただけたら、皆さんは地域や県、国の財産にきつとなる人物です。自分自身にもっと誇りをもってください。まさに「言葉は力」です。その言葉の力を最大限に生かせる生き方を選んでください。社会参画していく上でまずは自分の家族そして地域・学校そして社会に、「自分がどうかかわっていけばいいのか」という視点を今後も大切に持ち続けてください。つまり「今日の発表に自信を持って今後誇り高い人生を歩んでいただきたい」、これこそが審査員一同の願いです。

一昨年の本大会は、コロナの感染拡大の影響からビデオ録画による発表審査でした。発表された皆さんは今日ここでとても緊張をされたことと思います。皆の前で一回勝負の発表をすることは、辛く厳しくてこれこそ真剣勝負です。しかし、この厳しい体験こそが自分自身の成長につながると信じてください。今日の皆さんの発表には多少の失敗もあったかもしれませんが、今後の自分にとって大成功につながると大きな自信にしてください、今日の自分を褒めて高く評価してください。

会場の皆さん、今日発表をされた15名の皆さんに大きな拍手を送っていただけますでしょうか。皆さん、本当によくがんばりました。(拍手)

以上で審査員会を代表した講評を終えます。ありがとうございました。

(以上)

「少年の主張」・中学生話し方大会 2023

第45回「少年の主張」広島県大会開催要領 第57回中学生話し方広島大会開催要領

- 1 趣 旨 国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う 子供たちには、論理的に物事を考える力、自分の主張を正しく伝える力、広い視野と柔軟な発想や創造性などを身につけることが求められている。
この大会は、中学生が話すことによって伝える力を育み、学び合う機会となるとともに、意見発表を通して、中学生への理解と認識を深めてもらうことをねらいとする。
- 2 対 象 広島県内の中学生
- 3 主 催 公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟
独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 4 協 賛 国際ソロプチミスト広島、広島清流ライオンズクラブ、
公益財団法人広島青少年文化センター
- 5 後 援 広島県、広島県教育委員会、広島市、広島市教育委員会、広島県公立中学校長会、
広島県私立中学高等学校協会校長会、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、
広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島
- 6 開催日時 令和5年9月2日（土） 10：00～14：30
- 7 日 程 9：30～10：00 受付
10：00～10：15 開会行事
10：15～12：30 発表
12：30～13：30 昼食
「少年の主張」全国大会のDVD上映
13：30～14：30 審査発表、表彰、閉会行事
- 8 開催場所 広島県社会福祉会館 2階 講堂
(広島市南区比治山本町12-2)
(注) 諸事情によっては、日程及び運営等を変更する場合があります。
- 9 発表内容 次のA、B、Cの中から、日ごろ心に思っていること、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由でユニークな発想と、飾り気のない言葉でまとめたもの。
なお、未発表、自作のものに限ります。
また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。
A 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
B 家庭、学校生活、社会（地域活動）または、身の回りや友だちとの関わりなど。
C テレビや新聞などで報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

- 10 発 表 小道具は、使用しない。
発表時間は5分程度（目安として400字詰め原稿用紙4枚程度）
ただし、6分を超えるものは審査対象外となりますので、ご注意ください。
- 11 応募方法 申込書に原稿を添えて、中学校長を經由して提出する（原稿は返却しない）。
ただし、市町、青少年育成市町民会議等の類似の大会で入賞した中学生の応募も可とする。
この場合、市町等においてその旨を付記して、市町等から提出するものとする。
原稿は原則**400字詰め原稿用紙（A4判縦書き）を使用すること**。（学校等で使用されるB4判縦書きも可とする。）
- 12 申込締切 **令和5年7月31日（月）必着**
- 13 事前選考 提出された原稿を主催者において審査し、大会出場者を決定する。なお、大会の出場資格を得た者については、各中学校長等あてに8月中旬に通知する。
- 14 審 査 審査は、学識経験者、マスコミ関係者、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成広島県民会議及び広島県中学校話し方連盟並びに協賛団体の代表者によって構成する審査会で行う。
- 15 表 彰 広島県知事賞、(公社)青少年育成広島県民会議会長賞、広島県中学校話し方連盟会長賞、国際ソロプチミスト広島会長賞、広島清流ライオンズクラブ会長賞（各1名）、優秀賞（若干名）及び優良賞を選考し賞状を贈る。
- 16 副 賞 この大会で、広島県知事賞、(公社)青少年育成広島県民会議会長賞、広島県中学校話し方連盟会長賞、広島清流ライオンズクラブ会長賞、国際ソロプチミスト広島会長賞を受賞した5名には、副賞として海外研修が(公財)広島青少年文化センターから授与される。
時 期：令和6年夏休期間の5日間（予定）
訪問先：大韓民国（予定）
- 17 そ の 他 この大会で、広島県知事賞を受賞した者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構主催の「少年の主張」全国大会（11月12日（日）東京で開催）への出場候補者として推薦する。
- 18 問い合わせ先
申込み先 公益社団法人青少年育成広島県民会議「少年の主張」係
〒730-8511 広島市中区基町10-52（広島県環境県民局県民活動課内）
電 話 082-513-2742
ファクス 082-511-2173

審査員及び審査基準

1 審査員

審査員長	和田	晋	比治山大学非常勤講師
審査員	石原	剛	広島市教育委員会指導第二課指導主事
//	江種	則貴	公益社団法人青少年育成広島県民会議副会長
//	砂子田	淳子	国際ソロプチミスト広島会長
//	関根	紗絵	広島県教育委員会義務教育指導課指導主事
//	田原	直樹	中国新聞社論説委員
//	樽谷	和子	公益財団法人広島青少年文化センター 理事
//	中村	好宏	広島県環境県民局県民活動課長
//	東森	貴信	広島清流ライオンズクラブ会長
//	藤本	恵	広島県中学校話し方連盟顧問
//	堀井	洋一	NHKチーフアナウンサー

(五十音順、敬称略)

2 審査の基準

概ね次の点を採点ポイントとし、内容、論旨、表現、態度等総合的に評価を行う。

- ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか。
(柔軟な発想に基づく意見や提言、未来への希望や夢・メッセージ、新しい情報や視点など)
- ② 具体的な内容とともに、一般性・社会性の広がりがあるか。
- ③ 提案や提言を実現・実践する意欲や積極性が感じられるか。
- ④ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- ⑤ 発表に熱意が感じられ、迫力があるか。
- ⑥ 主張の内容が感銘と共感を与えているか。
- ⑦ 説得力のある話し方であるか。
- ⑧ 発表の早さや間のおき方、姿勢が適当であるか。

私が歩む夢への道

鳥取県米子市立東山中学校

3年 矢 曳 未 来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、6年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には二つ上の姉がいる。私は今、中学校3年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れたくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がるとき、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの3年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分ではできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

「家庭の日」に関する作文・図画

特選

心から出た応えん

東広島市立御藺宇小学校

6年 堀田 佳菜子

「ラストがんばれ。」

自分では、考えられないほどの声が出た。それは、ある大会のことだった。

私には、中学生の兄がいる。部活で、陸上部の長きよりをしている。私は、とても、しんどそうに思うが、兄は、とても楽しそうに部活をしている。兄からすすめられているし、部活でやってみようかと少しなやんでいる。記録会のような大会がひんぱんにあり、応えんにいくことがめんどくさくなるときがある。とても早い時間から会場へ、行かないといけないし、暑かったり寒かったりするからだ。待ち時間も長いし、あまり行きたくないのである。

その日も、いつもと同じようにとても早い時間に出かけた。またこんな時間に行くのか。めんどくさいな。いつもの感想が頭をよぎった。会場に着いて、兄の順番が来るまで待つ。この時間もひまなんだよな。車の外に出て、どこで見るかの席を決めに行く。ファンを片手に歩いて行った。

兄の走る順番が近づいてきた。遠くにアップをしている兄が見えた。あ。お兄ちゃんが見えた。暑いな。早く家に帰りたいな。兄の姿が見えたのにも関わらず、私はすすしい所に行きたいとばかり考えていた。レースが音と共にスタートした。兄は、とても良いスタートをきった。もしかして1位があるかもしれない。少しずつ兄のレースのことを考え始めた。1位を保ちながらどんどん走っていく。

「少し応えんしてあげたら。」

母が私に声をかける。

「はずかしいから、いやだよ。」

と返事をした。母には、こう返したものの、私は、1位で走っていく兄を見て少しずつときどきしていた。そのとき2位の選手が1位の兄に、どんどん近づいて来た。これは、やばいぞ。このとき、私は暑さなんて言葉は、頭から消え兄のレースに夢中だった。するとラスト一周で、2位の選手と兄の差が広がっていった。本当にあるぞ、お兄ちゃんががんばれ。と心の中で言った。残り百メートルをきった。その時、

「ラストがんばれ。」

と、兄に伝わるような大きな声で言った。それは、心から出た応えんだった。そして、1位のまま兄は、ゴールした。本当に興奮してきた。あれだけめんどくさかった応えんも、楽しいと思えた。家に帰って来た兄に、

「良くがんばったね。私の声聞こえた？」

と私が聞くと、

「すごく聞こえてきたよ。応えんしてくれてありがとう。」

とやさしく返してくれた。

家族の応えんは、とてもすごい力があるんだなと思った。また、次に大会があるときは、力をあげられるように、しっかり応援をしてあげたい。

今から約1年前の、私が小学校6年生の時、ずっとあこがれだった、妹が生まれました。私は赤ちゃんが好きだし、小さくなった自分の服を着せてあげたいと思い、妹ができることにあこがれていました。

母のおなかに赤ちゃんがいると分かってから、夏休みの間中、妹が生まれてくるのを、まだかまだかと毎日楽しみに待っていました。

夏休みが終わり、9月になった頃、妹が生まれました。妹と母が退院する日、私は学校を休んで、病院へ迎えにいきました。妹は私に比べて何倍も小さくて、体中がとても赤かったです。抱いてみました。そのとき、「この子が私の妹なんだ。」と実感しました。

その日は母方の祖母の家に帰りました。一週間かけて、家族みんなで名前を考えました。そして、「明(めい)」という名前に決めました。父が考えた名前です。私はその名前から、明るくてポジティブな子になってほしいなと思いました。

あれから約1年がたちました。この1年、妹はとても成長しました。首がすわったり、寝返りができるようになったり、はいはいできるようになったりしました。中でも私が一番うれしかった成長は、生まれたての頃よりよく笑ってくれるようになったことです。そして私は妹を笑わせることがとても楽しみになりました。

楽しいことばかりではなく、大変なこともたくさんありました。夜はたくさん泣いたり、すぐに危ないところに行ったり、部屋を散らかしてしまったり、母も父も、妹のお世話にとても手を焼いていました。手伝おうと思って私もやってみたのですが、うまくできなくて、難しいなと感じていました。母も、泣き止まない妹に困って、きつく言ってしまうこともありました。けれど、それ以上にかわいがっているところをたくさん見ました。

そうしているうちに、私もこんな風に育ててもらったのだと感じるようになりました。私が妹くらいの時にも、きっとこんなに手がかかっていたんだと。そして、祖父や祖母、親戚や家族からも、きっと妹と同じように、こんなにかわいがってもらっていたんだと。

私は、自分が小さい頃のアルバムを開いてみました。家族や祖父母と一緒に写っている写真を見ると、私にとても愛情を注いでくれているということが、一目で分かりました。

私は今、12歳です。妹が生まれたことで私をこんなに一生懸命、12歳まで育ててくれたということに、改めて気づきました。そして、そのことに対して感謝の気持ちをもつようになりました。

家族に大事に育ててもらった私が、家族に、家族として、今できることは何かと考えます。妹の世話を手伝えること、妹をかわいがることが、今まで私を育ててくれたことに対する感謝の気持ちを表すことにつながるのではないかと思います。

これからも妹の成長を楽しみながら、私もお世話を手伝い、家族みんなで妹を大切に育てていきたいと思います。

特選

母が不在の日

東広島市立西条中学校

3年 橋本 夢叶

今年の2月に母が入院・手術をした。手術は婦人系の病気で命に関わる重篤なものではないと母から説明を受けていたが、やはり『手術をする』と言われると心配だった。

実は、これで2回目の入院・手術。前は父も仕事を休み、二つ上の兄もいたので私も家事を手伝う程度で終わっていた。しかし、今回は父は手術の日しか仕事を休むことができず、兄は高校生になり部活の関係で寮に入っており、不在。家のことを頑張ってやってみようと思った。しかし、母の入院が近づくことと共に色々不安になってきた。そんな私を尻目に母はあたかも旅行に行くように楽しそうに準備をしている。2回目の入院のためか手慣れたように病室で読む本・パック・お菓子をバッグに入れていた…。

ついに母が入院する日。平日で私は学校の日なので、いつも通り登校する。いつもと同じように母が玄関まで出てきて、

「忘れ物ないんね？カギもとるん？気を付けて行きんさいよ！！」

と大きな声で言ってきた。いつもは、声が大きいし少しはずかしいけれど、今日はさみしく感じた。心の中で『お母さんも気を付けていきんさいよ。』と思った。授業を受け、部活をし、家に帰るといつもは家の電気が付いているのに真っ暗で飼っているペットの小型犬が家の中でクンクンと鳴いていた。犬の世話をし、母が作ってくれたカレーを温めて食べた。夕食の時間は母に今日の学校での出来事を話しているのにテレビの音しか聞こえない。片付けをし、冷蔵庫を開けると母が作り置きしてくれたマカロニサラダを見つけ、またさみしくなった。父が帰宅し、カレーを温め直し、サラダと共に食卓に出す。たったこれだけなのに疲れてしまい、お風呂に入って早々に横になった。明日は手術の日…それを考えるとなかなか寝つけなかった。

次の日の朝、いつも母がしている家事は父がしてくれ私は学校へ行った。どうか手術が無事に終わりますようにと何百回、何千回も祈った。部活を終え、私は足早に家に帰り、父から無事に手術を終えたことを聞き、ホッとした。父と一緒に洗濯を干した時に、病院での母の洗濯物を見つけ、母は今しんどくないか、辛くないかと再び心配した。

母の手術と翌日はとてもさみしい朝。起こしてくれる人もいない、一緒にご飯を食べる人もいない、そしていつもの『忘れ物ないんね？』という言葉も聞けない。早く帰ってきて欲しい、でもやっぱり元気になって欲しい。母は今何をしているのかなあ。そんな事をまた思い、1日を終えた。

「今日お母さん何時に帰るん？」

と、その翌日早起きして父に聞いた。

「夢叶が帰ってきたら家におるよ」

その日は時間がすぎるのがとても早く、あっという間に夕方になった。自転車で家が見える所まで帰ると家に灯りがついているのが見え、嬉しくなった。いつもより大きい声で

「ただいま！」

と言うと、玄関まで母が笑顔で来てくれ

「おかえり」

と言ってくれ涙が出た。母から色々入院時の話を聞いた。

「手術の後は少し大変だったけど、三食昼寝つきだったけん、少しゆつくりできたんよ。あと1日くらい入院してもよかったかもねえあつ冗談冗談!! 早く帰ってたかったよ。会いたかったよ！」

と言われ、私も笑った。

母がいない3日間。母の存在のありがたさと健康な体は大切だと思った。朝の玄関までのお見送りもやっぱり嬉しい。これからもずっと元気で玄関で見送ってほしい。

ありがとう。私のお母さん。

入選

かっこよくてやさしくてしっかりもの

三原市立糸崎小学校

1年 岡野真拓

ぼくには、3にんのおねえちゃんがあります。いちばんうえのおねえちゃんは、がんばりやさんです。ばすけつとぼうるのれんしゅうをまいにちがんばっています。なつやすみにぼくもいっぱいっしょにれんしゅうしました。

おねえちゃんがきゅうけいのときに、

「まあくん、いったいいちしよう。」

といったので、ぼくは、

「いいよ。まあくんがぜったいにかつけれ。」といいました。やってみるとぜんぜんしゅうとまでいけませんでした。ずるをしてぼうるをもってはしてもぜんぶとめられました。おねえちゃんが、

「ふえいんと、ふえいんと。」

といったので、はんたいにいくとみせかけてみぎにおもいきりはしりました。

「うわあ。ぬかれたー。まあくんうまいね。」とっておねえちゃんがしりもちをつきました。あたまやかおからだにあせがいっぱいでした。ばすけつとぼうるをしているおねえちゃんがかっこいいです。

にばんめのおねえちゃんは、いつもやさしいです。ぼくは、あまえんぼうになります。

おねえちゃんが、

「まあくん、おはよう。おきて。」

といっても、ぼくはおきてるのにねてるまねをします。そしたら、

「ごはんできてるよ。」

とあってだっこしてくれます。ぼくは、おねえちゃんのだっこがだいすきです。ごはんを食べるときもてれびをみるときもねるときもいつもよこにいます。やさしいおねえちゃんがいるからぼくはがんばれます。

さんばんめのおねえちゃんは、よくけんかをします。でもいちばんいっしょにいます。おべんきょうもぴあののれんしゅうもおてつだいもいっしょにします。ぴあののれんしゅうのとき、おねえちゃんが

「もっとちからぬいて。」

といったら、ぼくは、

「わかってるよ。ちゃんとやってるよ。」

といてしまいます。ここでは（おねえちゃんのいうとおりだ。ありがとう。）とおもっているのにはんたいことばをいってしまいます。それなのにおねえちゃんは、

「そうそう。じょうずだよ。」

といてぼくをげんきにしてくれます。おねえちゃんがいろいろなことをおしえてくれます。ぼくは、よくきいておねえちゃんみたいにしっかりものになりたいです。

ぼくは、さんにんのおねえちゃんがいってよかったです。ぼくもかっこよくて、やさしくて、しっかりものになれるようがんばります。

入 選

おじいちゃんとおぼく

竹原市立竹原西小学校

2年 岡 本 琥 雅

ぼくは、おじいちゃんが大好きです。

ぼくのお家は、自働車のせいびこうじょうです。おじいちゃんがつくったかいしゃです。大がたトラックや中がたトラック、大がたバス、ホイールローダー、クレーン車などのとくしゅ車りょうのせいびや車けんをします。色いろな車やトラックが、こうじょうの中に入ってくるので、ぼくはワクワクします。タイヤはぼくのせよりも高く大きいものもあります。こうじょうの中には、たくさんしゅるいのどうぐやきかいがあります。トラックをバラバラにして、そのどうぐをつかってしゅうりをします。車けんやしゅうりをしたら、せん車をしておきゃくさんにかえします。

ぼくは、ときどき小学校からかえったら、おとうさんのしごとを手つだいます。おとうさんは、クレーンのオペレーターもしています。クレーンをあらったり、ユニックにのって、ユンボをかいそうしたり、おとうさんに言われたどうぐをもっていったりします。おてつだいをしていると、「らいがくんは、かしこいの。」

と言って、おじいちゃんがほめてくれます。ぼくは、うれしくていっぱいおてつだいをしたくなります。

なつになると、フォークリフトに水タンクをのせて、さくらの木に水やりをします。ぼくは水タンクのせんをおじいちゃんに言われたとおりに、あけたりしめたりします。木はたくさんあるので、水やりは大へんです。今年は、おとうさんといっしょに水やりをします。なぜなら、きょ年の年まつにおじいちゃんはガンのびょう気でなくなったからです。

おじいちゃんが入いんしているときは、コロナでお見まいに行けませんでした。一どだけオンラインめん会をしました。そのときのおじいちゃんは、とてもやせていて、はなにチューブをつけて目をとじていました。

「おじいちゃん、らいがだよ。」

と話しかけると、おじいちゃんは、

「うんうん。」

と言って、ぼくの声だけにうなずいて目をあけてくれました。その3日ごにおじいちゃんは、なくなりました。

「らいがくんが大きくなったらクレーンをかうけんの。ここのかいしゃをらいがくんにあげるけんの。」

とおじいちゃんは、よく言っていました。

ぼくは、16さいになったらクレーンのオペレーターになりたいです。そして、おじいちゃんの会しゃをおとうさんといっしょに、つづけていきたいです。

「おじいちゃん、大きくなるまでずっと見てほしかったけど、お空から見ててね。ぼく、がんばるからね。」

おじいちゃんにとどきますように。



思い出のつまった通学路

竹原市立竹原西小学校

3年 馬場 陽菜

わたしは、1年生のはじめのころに、学校に、行くのが苦手でした。なぜなら、
「きゅう食が全部食べれるかな。」
「友だちが出来るかな。」
などを考えているうちに心細くなって自然にドキドキしてきてなみだが目にあふれてきてしまっていたからです。

そんなとき、お母さんが手をつないで、校門までいっしょに行ってくれました。なみだが出そうになったら、しりとりをしながら行きました。お母さんと、手をはなせないでいたら、6年生のおねえさんがかわりに手をつないで、教室までつれていってくれました。
「おねえさんがいたら今日はきゅう食が食べられそうだな。」
と思いました。

お母さんがいっしょにいけないときは、二番目のおにいちゃんがいっしょに行ってくれました。
「今日はひなのすきな、きゅう食のメニューだぞ。」
と、いってくれたり、
「あそこのたて物まできょうそうだ。」

といてかけっこをしながら楽しく行くと、あっというまに学校にたどりつくことができました。

朝学校に行くまえに、しくしくないていることを心配して、広島にいるおじいちゃん、おばあちゃんがメロンをおくってくれました。朝メロンを食べたら元気ができました。

なきながら行っていると、近所のおじさんが、
「いっしょに行つてあげようか。」
と、やさしく声をかけてくれました。そのおじさんがバラのていれをいつもしているのでおじさんがいないときも、きれいな花をみると気持ちがおちつきました。

集団登校でいけるようになった時、となりの家のいとこのひまりちゃんといっしょに行くようになりまし。と中きれいな花をつんで花たばをつくったり、
「遠足どこいきたい」

などお話をしながらいきました。お話するのが楽しくて学校におくれそうになってあわててはしたこともありました。

ある日、ひまりちゃんが学校をお休みするとき、一人でいくことになりました。そのとき、昨日友だちとやくそくしたのを思い出して、
「友だちとやくそくしたんだから、行かないと友だちが待っているから。」
と思いがんばってなんとか一人でいくことができました。

通学路には、家ぞくや近所の人たちに助けてもらった思い出がたく山つまっているの、その思い出を力にしながらがんばって通つていこうと思います。これからも通学路の思い出がたくさんできたらいいなと、思います。

入選

二人三きゃくでがんばった全国大会

竹原市立竹原西小学校

4年 井手元 稔

「本日の選考会の結果は合かくです。全国大会へ向けて、ベストをつくして下さい。」

このしゅん間から、ぼくとお母さんの空手の特訓が始まる。お母さんは声をあげてよろこんだ。ぼくも、合かくしてうれしかった反面、まずい事になったなああと、あせった。なぜなら、まだ緑おびだったし、どきょうだめしで、選考会を受けたから、まさか自分が合かくするなんて思ってもいなかったからだ。でも、合かくしたからには、勝ちたい。そう思ったぼくは、大会までの3か月間を、空手に全力を注ごうと決めたのだった。

それからぼくは、今まで週2回しかけいこに行っていかなかったのを週4回にふやした。そのために、お母さんは、今までより仕事を早く終わらせてくれて、そうげいしてくれるようになった。それにくわえて、大会の2か月前からは、東広島島の八本まつにある本部館道場での強化練習に行く事になった。その他にも神社での必勝き願や、結だん式、そう行式など、たくさんの行事に、ぼくとお母さんは、休まずさんかした。毎週、東広島まで、行くのは、ねむたかったし、大変だったけど、練習の後に、いつもお母さんがアイスを買ってきて、いっしょに食べた事や、帰りの車の中で、好きな曲をいっしょに歌ったりきいたりするのが、楽しかったし、つかれがふきとんだ。

けいこがない日は、毎回1時間家で練習をかかさずやった。しはんに注意された事をふく習して、き本練習や、型の練習をくり返しやった。家での練習は、いつもお母さんが見てくれた。お母さんは、ぼくの型をスマホでさつえいしてくれて、型の悪いところがないかいっしょにチェックした。

こうして、ぼくとお母さんは、3か月間、二人三きゃくでがんばった。

そして、大会当日の朝、ぼくは少しきんちょうしていたけど、しはんに今まで注意された事を、全力で出しきれるようにがんばるぞ！と、思いながらコートに立った。ぼくの相手は、かく上の茶色おびだったが色にびびらずに、自分の型をやろうと思った。

「アーナクーの型ようい、始め！」

と、しんぱんが言いはなった。

ぼくは、全力を、出しきったが、結果は負けだった。でも、同じ道場の仲間と、お母さんが、はく手で向かえてくれた時には、とてもうれしかった。そして、仲間達が、感動したと言ってくれた時には、ぼくは、なきそうになった。お母さんはなみだ目になっていた。

今回は、負けて悔しかったけど、次に来る県大会では、にゅうしょうしようとして、心から決めたのだった。



入選 まほうの言葉

広島市立井口小学校

4年 玖村 桃

「アハハハ」

今日もわたしの家には、え顔の花がさいている。わたしの家族はどんな時にだってわらい合える明るい家族。おこったり泣いたりもするけれど、仲直りの後は決まって「アハハハ」とわらってる。わたしはそんな家族が大好きなんだ。

わたしの家族は三人家族。どんな時でもわらわせてくれるムードメーカーのお父さん。明るくて心やさしいお母さん。そして、一番愛されているわたし。

そんなわたしの家族には、いつも心がけている一つの言葉がある。それは「まあいっか」という言葉だ。わたしは、小さいころから何でも気にしすぎてしまう所があり、少しのしっばいで「大丈夫かな。」とってしまう。

その度にお母さんは、

「大丈夫だよ。まあいっかだよ。」

とはげましてくれる。そしたらわたしも、

「そうだよ。まあいっかだよ。」と気がつく事が出来るんだ。

わたしが1年生のころ、世の中は「コロナウイルス」という病気が流行し始めていた。大人も子どももマスクをつけ、人にできるだけ近づかないようにと言われた。

1年生になる事が楽しみでワクワクしていたわたし。けれどいざ始まると、みつにならないようにクラスを半分に分け、午前と午後に分かれて登校するようになった。時には休校になる期間もあり、先生にも友達にも会えず、たくさんわたされたプリントを、家でただただ勉強するしかなかった。

学校生活が始まるも、人にもあまり近づけず、マスクのせいで先生や友達の様も見えなかった。そんな中、先生に初めて小さな注意をされた事があった。なぜ注意されたのかは忘れたが、とにかく泣くのを必死にこらえて帰った記おくが頭にのこっている。そんなわたしを受け止めてくれたのがお母さん。わたしが泣きやむまでずっとだっこしてくれた。

「大丈夫。まあいっかだよ。」

そしてわたしは、魔法がかかったようにすぐ泣きやんだ。お母さんの体はとってまあったかくて、わたしの心まであったかくなった気がしたんだ。

4年生になった今、あれからもいろんな事があったが、乗り越えられる方法をその度に二人で考えて、今では少しだけ強くなれた気がする。そんなときにはいつもお母さんが、「どんなあなたもすてきだし、いつでもお母さんは味方だよ。それに一番のおうえんだんだからね。大丈夫。まあいっかだよ。」

とだきしめてくれる。

いつかわたしに家族が出来たら、どんな家族になれるかな。子どもの心をやさしく受け止めてあげられる、すてきな親になりたいな。

入選

5本の矢

東広島市立西条小学校

6年 松本 樹実

私はサンフレッチェが大好きで週末家族でスタジアムへ見に行くのを楽しみにしている。チーム名の由来となった『3本の矢』の故事は、『1本の矢は簡単に折れるが、3本まとめてでは折れにくい。力を合わせ助け合うことが大事。』という意味である。ふと思い返すと私の家は常に助け合いであふれている。それを実感した出来事がある。

夏休みの初めに、私はコロナウイルスにかかった。とてもしんどかった。だが、父や母、姉や妹がたくさん助けてくれた。飲み物がなくなったら妹が部屋の前まで運んでくれたり、ゼリーしか食べれない時は父が買って来てくれたりした。家族と離れていないといけなかったので夜は特に不安だったが、母が隣の部屋のソファで寝てくれた。また、体温が上がって苦しんでいた時には家族全員が「大丈夫？」と心配そうにしてくれた。そのおかげでゆっくりと休むことができてあつという間に元気になった。感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

その感謝を恩返しする時が来た。数日後に今度は母と姉が感染してしまったのだ。とても心配だった。頼りがいのある母と姉が病気になったら、父が仕事の時は私が妹の世話をしなければならない。絶対絶命のピンチ、不安しかない。しかし、母と姉はしんどそうなので責任を持って妹の面倒を見ようと思った。習い事の送り迎えをしたり、食べた食器を洗ったり、ごみを出しに行ったりした。その度に大変さを思い知った。いつも朝に早く起きて朝ごはんやお弁当を作っていたり、たくさん量の洗濯物を畳んでくれていたり、父と母はこれを毎日してくれているのだと思うと改めてすごいなと実感した。

しかし、一人でこれをずっと続けるのは難しいし、大変だと思う。その時私は気付いた。いつも母と父は助け合っていることに。父が仕事の時には母が家事をしてくれて、母が仕事の時は父が掃除機をかけ、ご飯を作り、洗濯物を取り入れるなどしてくれる。そういう助け合いによって家族が成立しているのだと私は考えた。

恩返しの時に「大丈夫？」と気かけると「大丈夫。ありがとう。」と言ってもらえてとてもうれしかった。わたしが苦しいときは助けてもらって助かった。こうして力を合わせたり支え合ったりするうちに心が強くなっていくのだと感じた。そうだ、私の家はまるで5本の矢で強いきずなを作り続けているのかもしれない。やっぱり助け合いはとても大事だ。

サンフレッチェはサポーターのことを“ファミリー”と呼び、大切な家族の一員と考えてくれる。わたしも、家族を超えた、もっとたくさんの場所でも、色んな人を助けていきたい。

入選 幸せ

広島県立三次中学校

1年 浦谷 優菜

ある日の休憩時間。私はいつも通り友達三人と話していました。いつもなら、みんなで共通する話題のことをよく話しているのに、その中の一人の子が「みんなが幸せだなあって感じるってどんな時？」と尋ねてきました。普段そんなことを考えていないので、上手に答えることができませんでした。

家路に着き、家族と夕食を食べている最中、弟、父、母の三人に「幸せって感じる時ってどんな時？」と、友達が今日聞いてきたことをそのまま家族に尋ねました。ゲーム好きな弟は「ゲームをしている時」、仕事熱心で家族思いな父は「家族と過ごしている時」、しっかり者の母は「家族と団欒して笑い合っている時」のように、それぞれ答えてくれました。でも、私はみんなみたいにすぐと言えるような、「幸せ」を感じる時が思いつきませんでした。

その日の夜、ベッドに入って色々考えてみました。「好きなアニメを見ている時?」、「友達と大口を開けながら笑っている時?」、両親が言っていたような「家族と団欒している時?」など色々考えてみましたが、なぜかどれもしっくりきませんでした。でも、思い返してみれば…と、私はあることが頭をよぎりました。世界には、貧困と闘い、今日生きていけても、明日はどうなるかわからないという人がたくさんいることを。でも私は、衣食住が足りて、この家に生まれて家族に恵まれ、もうそれだけで幸せなのではないかと思いました。

いつものように友達のところへ行ったら他愛もない話をして、いつものように授業を受け、いつものように給食を食べる。家族と食卓を囲むのも、一緒にテレビを見るのも、一緒に出かけるのも。そんな毎日が、だんだんと「幸せ」だと言うことに気がつきました。気がついていくと、何だか嬉しくなってきました。

放課後、「ただいまー」と言って帰路し、「おかえり!」と出迎えてくれる家族。そのやりとりでさえ、幸せだなあと感じました。その日の夕食時、私はいつものように学校であったことを家族に話している時、「今日は幸せだと感じる時のことを見つけた」と、私は家族に言いました。「どんなこと?」と母に尋ねられ、私は「当たり前のように生きていけること」と答えました。すると母が微笑み、「確かに、そうかもね」と言ったのです。

こうして家族と一緒に暮らしていけることも、私には当たり前なことだけど、世界にはこれが当たり前じゃないのかもしれない。だから、これからもこれまでも、家族との時間を大切にしていきたいと思います。

呉市立白岳中学校

1年 保手濱 夏実

「なっちゃん。草ぬきに来てや。大変なんよ畑が。」

「なっちゃんに頼むなや。忙しいんじゃけ。わしがするけい。」

「せんじゃないの。いつまでたっても。」

「じゃあ、おまえもせいや。」

これは、祖父母の口げんかです。そして、これは私にとって夏の訪れをつげます。私は、父と母と目くばせをして、

「今度、時間があったらね。」

と笑顔で言って、祖父母宅をあとにしました。私は、帰りの車の中で、去年の暑さと、虫と草との戦いを思い出し、思わずため息がでました。

夏の草の生命力には、本当に感心します。私が13年かけて大きくなった背を、1か月たらずで、追いこしていく草もあります。地上に出ている部分は少しでも、地中深く、広範囲に根をはっている草もあります。そのスピードに草ぬきが追いつかず、祖母が助けを求めてきたのです。祖母は近頃、これ以外のことでも、私たちに手伝ってと頼ってくるが増えたように思います。祖父は、まだ全てを自分でやろうと頑張っていますが、やるべきことがたまっていつているように思います。祖父のまだ、自分一人でするという思いを大切にしたい。しかし、現実として、二人のスピードや要領が悪くなってきているのも、最近の二人をみていて感じている。私たちは、今年も祖父に気をつかわせないために、祖父の外出に合わせて、草ぬきに行きました。長そで、長ズボン、長ぐつをはき、蚊とり線香を畑のあちらこちらに置き、草ぬきを始めました。

私が生まれて初めて口にした野菜は、祖父母が育ててくれた、にんじんだそうです。

幼い頃の写真をみると、きゅうりにトマト、スイカにとうもろこし、にんじん、大根などを机や床に目一杯広げながら、おいしそうにかぶりついている写真がたくさんあります。私は、草ぬきをしながら、あと何年、祖父母のつくった野菜を食べられるのかなと思いました。

次の日、畑をみた祖父から、

「ありがとう。助かったよ。」

と電話がかかってきました。私は、祖父に、

「何かあったら言ってね。」

と伝えました。父も母も腰が痛いと言いながらうれしそうでした。私が幼い頃、幼稚園や小学校によく迎えに来てくれた祖父母。習い事にも連れて行ってきて、私は、多くのことに挑戦できました。

これからは、私たちが支えていくことが増えていくかもしれません。自分の予定が急に崩されて、嫌だなと思うこともあります。それでも、やっぱり二人の笑顔がみたいので、これからも、自分のできる範囲で祖父母を支えていきたいです。



入選 思い違い

尾道市立美木中学校

2年 上 實 千 紗

みなさんには、学校を休む基準というものはあるだろうか。人それぞれ家庭の教育方針は違うし、それによって他の家庭と自分の家庭を比較して、不公平だと感じる人もいると思う。私もその一人だった。でも今は、母の教育方法に本当に感謝している。

私が不公平だと感じたのは、友達と学校の休けい時間中に話していた時だ。その友達が、「今日は自転車で行くのが面倒だったからお母さんに送ってもらった。」と言った。その友達は、お母さんに理由なしで休みたいと言ったら、普通に休ませてもらえる子。私の場合は、熱がない体調不良だったら学校に行かせられるし、送迎なんてことはない。薬を飲ませてもらい、自転車で行くことをうながされる。私はそれをつらく感じて、中学校1年生の時には、泣きながら登校していた。そんな時、車で送ってもらっていた友達が私に、「おはよ！」とあいさつをしてくれた。私はその時、本当に気分が悪かった。なんで私は自転車なのに、あの子は送ってもらえているんだろう。私だって雨のひどい日は送ってもらえるけど、快晴の日だったらどうして送ってもらえないの？勉強だってあの子より頑張っていて、そこそこの点数はとっているのに、どうして私の母は……？その時の私の心の中は、しっと心と不快さ、納とくがいかない気持ちでいっぱいだった。あんなに気分が悪くなったのは、初めてだった。だから私は、母に直接聞いてみた。「どうしてお母さんはいつも自分の足で行かせようとするの？」すると、母は、「じゃあ千紗をもう育てなくていいんだね？」と、私に静かに低い声で言った。私は理解ができなくて、リビングを飛び出し、自分の部屋に行った。自然と目の中に涙がたまってきた。30分程だろうか。ずっと泣き続けて目がはれ、疲れてきた。ボーッとしていると、いつの間にか寝ていた。夏の暑い日でエアコンをいれていなかったのを覚えている。目が覚めると、部屋が涼しく、私の体の上に着る毛布がかかっていることに気付いた。私は「お母さんだ」と思った。そしたらなぜか泣けてきた。私は母のところに急いだ。母は私を一目見た後、私を無言で抱きしめてくれた。私の大好きな母のにおい。本当にからからになるまで涙を流した。母は、「私がやっていることは、全部千紗のためだよ。」とだけ言った。母のさっきの低くて静かな声とは違う、安心できる、温かみのある声。さっきのエアコンのきいた部屋は、私が暑くて熱中症にならないため。毛布はエアコンでお腹を冷やさないようにするため。そして、いつも自転車で行かせるのは、私が少々のことでもへこたれないように、自分の力で困難を乗り越えられるようにする母なりの育て方だった。私は母の思いを知り、更に泣いてしまった。

私はずっと思い違いをしていた。母はずっと私のことを考えていてくれた。しんどいこともずっと続けると、苦痛ではなくなる。私も今は慣れた。困難にへこたれないようにしてくれた母には、今は感謝しかない。いつもありがとう。

入選

家族に感謝

三原市立大和中学校

2年 新原 悠真

僕のお父さん、お母さんは二人とも働いています。特にお父さんは生き物を相手にする仕事をしているため、1、2週間は帰ってこない事がほとんどです。家族がそろってご飯を食べるというのも1か月に2回か3回ぐらいです。お父さんは家に帰ってくる時は必ずお母さんに「帰るよ」と連絡してくれます。僕はその連絡が待ち遠しくて仕方ありません。だからお母さんから連絡があったことをきくととても嬉しい気持ちになります。我が家には家族がそろった時の定番メニューがあります。冬はお鍋、たこ焼きパーティー、夏はバーベキューです。みんなで買い物に行き、準備して、一つの輪になって家族全員の顔を見ながら食べるご飯は言葉では言い表せないほど最高の時間です。学校のできごとや、たわいもないこと、とにかく食事での会話がずっととまりません。そして僕たち家族の輪は笑顔であふれているのです。この楽しい時間が永遠に続いてほしい、ついついそう願ってしまうのです。しかし、このように楽しい時間があるからこそ、中学校での勉強や部活も頑張れるのだと思います。僕の充実した中学校生活は、家族に支えられています。学校で必要なものを準備したり、毎日ご飯をつくったりしてくれるお母さん。勉強でわからないことがあったらいつも助けてくれる姉。そして、忙しくてなかなか会えないけど僕の部活を応援してくれるお父さん。お父さんは仕事で忙しいのに疲れた顔一つ見せず、僕と一緒に部活で必要なテニス用品の買い物に行ってくれます。夏休みの始めにテニスの試合がありました。お父さんはいつも仕事で忙しいので見にくることができません。しかし、試合の時ふと観客席を見たらお父さんの姿がありました。僕は嬉しくてたまりませんでした。お父さんの応援の声はコートに立つ僕の耳にもはっきりと聞こえてきました。そして、ナイスプレーがあるとお父さんは手をたたいて喜んでくれました。僕はより一層頑張ろうという気持ちになって思いっきりプレーすることができ、その試合は勝つことができました。試合の後、お父さんは職場に戻らないといけなかったので、直接話すことはできませんでした。だから家に帰って「今日は来てくれて応援してくれてありがとう。」と伝えました。お父さんは「良く頑張ってたな、ナイスプレー。かっこよかったぞ。」と言ってくれました。僕は嬉しくて次も絶対に勝ちたいと強く思い、毎日練習やトレーニングを頑張っています。僕は今中学2年生です。気がつけばお母さんの身長も追いこし、お父さんの身長に近づいています。ここまで大きく成長できたのも家族のおかげだと感じています。必要な学習用品を準備してくれる、危ないことは注意してくれる、僕が困っているときには真剣に話してくれる、嬉しいときは心の底から共に大喜びしてほめてくれる。そんな家族がいてくれるからこそ、今の自分がいて、毎日頑張れる、僕は心からそう思っています。僕は僕の家族が大好きです。家族が笑顔だと僕も幸せです。そんな家族に改めて伝えたい言葉があります。

僕の家族へ、「ありがとう。」



入選 父への思い

呉市立東畑中学校

2年 高橋 瑠那

私の家族は、父、兄、弟そして私の計四人の一人親家庭です。母は私が小学2年生の時に、「他に大切な人ができた」と父から聞きました。その時、父がとても苦しそうにしていたのを今でも忘れません。

それからの生活は、母がいた時とは違い、とても大変なものでした。当時、兄は中学生、弟は幼稚園生と年齢が離れてはいましたが、喧嘩をしては弟が泣くということを繰り返していました。食事は父が作りました。もちろん父には料理の経験など全くなく、当初はとても苦労していました。スマホで調べたり、簡単な料理に挑戦してみたりと、私たちのために手を尽くしてくれました。

もちろん、それには限界もありました。私は家族の中の唯一の女性で、私以外は皆男性だったことでの苦労もありました。その他いろいろな苦労がありますが、中でも特に大変だったのは友達との違いです。皆はお母さんやお父さんがいるのが普通。お母さんはいるけれどお父さんはいないという子もクラスの中にいました。その子達には母子家庭が普通。そのことを周りの子に知られても特に何かがあるわけではなく、その子の周りにはいつもたくさんの方がいました。私も父子家庭であると言ってしまうと皆は分かってくれるはずなのに、皆と違う家庭であることを言い出せずにいました。授業参観やPTA活動があれば父が来てくれましたが、皆は不思議そうに見ていました。友達が何も言わないはずがなく、よく皆に聞かれました。でも私は、本当のことを言うと皆との間に距離ができてしまうのではと思い、気がつけば皆には嘘をついてしまっていました。嘘をつくのは良くないとわかってはいるのですが、皆に距離を置かれる方が嫌だったのです。このことでよく父に話を聞いてもらいました。父も私の気持ちをよくわかってくれ、その度に私をハグしてくれました。父のハグは、まだ小さかった私にとって、とても安心させてくれるものでした。今でもまだ、一人親であることはなかなか友達には言えませんが、いつか言えたらなと思っています。

中学2年になり、あの頃より大きくなって思うことは、今に至るまで、父がいなかったら確実にここまで生きてこれなかったということ。父がここまで私達を育ててくれ、何があっても私達のことを見捨てず、愛情をかけてくれたからこそ今があるということです。

父は、ことあるごとに自分よりも子供達のことを優先し、絶対的な愛情で守ってくれました。父も一人の人間だから疲れることもあったと思います。しかし、自分がどんな状況でも私達を見守ってくれました。だから私達は前に進むことができました。そんな父は、誰に何と言われようとも、私達の自慢で、カッコイイお父さんです。これから先も何があるかはわからないけれど、父と一緒に家族四人で乗り越えていきたいです。

お父さん、ありがとう。

入選

曾祖母との思い出

三次市立塩町中学校

2年 谷川 優華

「これがユツならあんたはミカンか」

このセリフは4年前に亡くなった曾祖母が私の事を呼ぶ時に必ず言っていた言葉です。

私は産まれた頃、今の家ではなく祖父母の家で暮らしていました。その頃曾祖母は車で40分程離れた不便な所で一人で暮らしていたそうです。そして私が2歳の頃、心臓の病気で入院したのを機に祖父母の家と一緒に暮らすことになりました。私は小さかったのであまり覚えていませんが、当時の曾祖母はとても穏やかで怒った所を見た事のない絵に書いた様な優しいおばあちゃんだったと母から聞きました。私も姉も曾祖母が大好きで保育所から帰ると曾祖母の部屋へ行き夕食などが終われば寝るまでまた曾祖母の所で過ごすほど慕っていたそうです。曾祖母も毎日楽しそうに暮らして本当に良かったとその時母は思ったそうです。

それからしばらくして曾祖母の様子が変わってきたそうです。同じ事を聞いたり探し物が増えたり機嫌が悪く意地悪な言い方をするようになっていきました。この頃になると私も当時の記憶が残っていて、優しく大好きだった曾祖母の変化が悲しかったのを覚えています。仲良しだった母と曾祖母のケンカが増え部屋に行く事も少しずつ減っていきました。曾祖母は認知症を発症してしまいました。まだ子供だった私は認知症という病気を知らずなぜ冷たくなってしまったのか解らず不安でした。家の中の空気も悪く皆ピリピリとしていた様な気がしました。

そんな毎日をご過ごしている中、私が小学校へ入学するタイミングで私達家族は、祖父母の家から引っ越しました。母は曾祖母の昼食作りに行ったりディサービスの送迎をしたり病院への通院に付きそったりと引っ越してから介護に通っていました。曾祖母の症状が悪化する程母と祖母が疲れていったのを子供心に覚えています。少しずつ顔や名前を忘れていった頃、曾祖母はグループホームという認知症の人達が共同生活を送る施設へ入所しました。今なら解る気がします。母と祖母は家での介護の限界が来ていたのだと。

入所してからも月に一度は必ず曾祖母の所へ会いに行きました。私の名前はゆな、姉の名前はゆづきです。認知症の進んだ曾祖母は母の名前は忘れていました。しかし母が姉を指さして「これは誰？」と聞くと悩んでましたが「ユツか」と思い出します。その後は私の方を見て満面の笑みで「じゃあ、あんたはミカンか」と言って大笑いします。「ウソよの一。ユナよの一。」とその後言い直してくれますが、私はこのユツとミカンの時の曾祖母の笑顔が今でも忘れられません。結局最後の頃は私達を見ても解らなくなってしまうしましたが、曾祖母が一番最後まで覚えていた名前が自分の娘の祖母でも孫の母でもなく数年一緒に暮らしていただけたひ孫の私と姉だった事が何だか今でも嬉しくて忘れられません。

認知症になると新しい事から忘れていって昔の事を最後まで覚えているのが一般的なのだそうです。しかし曾祖母は違っていました。

この事をまだ曾祖母が認知症でお世話になっていた病院へ受診した時に先生へ母が話したそうです。そうすると先生もとてもおどろかれ、「一緒に過ごした数年がとても楽しかったんでしょうね。理性で覚えているのではなく、本能で覚えているんだと思いますよ」と言われたと教えてくれました。それを聞いて私は胸が熱くなりました。一緒に過ごした数年。私の事をミカンと呼んで見せてくれた笑顔。どれも私の最高の思い出です。

「これがユツならあんたはミカンか」

この言葉をこれから先、大人になっても、柚やミカンを見る度に思い出したいと思います。その時は大好きだった曾祖母の笑顔と一緒に思い出したいです。

入選

妹の応援のすごさ

東広島市立松賀中学校

2年 堀田 倅 希

「頑張れ。」

家族の一言で僕は、一步、前に足を運ぶことができる。

僕は今、中学生で陸上部に所属している。陸上の大会の会場は、県の大会ならば広島市内になることが多い。僕の住んでいる地域から遠いが、両親は嫌な顔一つせず、僕を応援しに遠い所まで来てくれる。朝早い時間に走る時、両親も眠いはずなのに僕を起こしてくれたり、送迎してくれたりしている。

そんな中、妹はあまりいい顔をしてくれなかった。

「えーお兄ちゃんの応援には行きたくない。外で応援するのは暑いし、面どうくさいよ。」

と言い、最初は行きたがらない。両親の説得のもと、結局応援には来てくれるが、嫌な気持ちが顔から読み取れた。そんな中でも、最も行きたがらなかったのは、県の大会である。広島市内で行われる上、その場に到着してからも、僕が走るまで2時間も待たないといけないからだ。妹は、出発のぎりぎりまで行かないと言っていた。僕は正直、今回は来てくれないだろうと思っていた。しかし、妹はどうして嫌なのについて来てくれるのだろうと僕は、不思議で仕方がなかった。

しかし、その後の大会で妹の想いと家族の言葉の強さを知ることになる。僕はある大会で先頭を走っていた。しかし、半分を過ぎたところで他校の人に追いつかれてしまった。そう思っていた時、抜かされた。抜きかえさないといけないのに、しんどくてできない。むしろこのままでは離されてしまいそうだと感じた。その時だった。

「お兄ちゃん、頑張れ。」

僕の耳にははっきりと聞こえたのだ。今までにないとても大きな声。妹の一生懸命な応援が力となった。僕はとめてしまいそうだった足を前に出すことができた。そして、なんと最後までせり合うことができ、さらに、1位でフィニッシュするという結果だった。今までで一番大きな声援は今でも忘れられない。

実は僕は、大会で走っている時、応援の声が聞こえない。走ることに必死になっているからだ。声に意識が向けられないのだが、妹の声ははっきりと頭に入ってきた。応援しているとき妹の特別な思いがあったのかもしれない。妹の本当の思いを知ることができた。

僕は今、陸上を頑張れているが、家族がいなければ陸上を続けられていないだろう。日々の生活も、大会の送迎も、大会の応援も、家族の協力がなければ僕は走り続けられていないだろう。家族は「心」の支えだと、本当につくづく思う。

家族にとっても僕がかけがえのない存在になるように、僕ができることを一つずつやっていきたい。

両親、そして妹いつもありがとう。感謝している。



入選 みんなでご飯

三原市立久井中学校

2年 宗岡 美来

「みんなで食べようね。」

私には、曾祖母がいます。とても優しく笑顔が素敵でみんなにたくさんの愛情をくれます。私たちには、正月に親戚が集まって一緒にごはんを食べる、そんな、毎年恒例の行事があります。

母も叔母も祖母も前日から一つずつ丁寧にご馳走をつくっていました。コロナの影響で2年ほど集まることができなかったのも、みんなとてもワクワクしていました。料理ができ、食器を運ぶのは私たち子供の役割です。

いざ広い机の周りを囲うように座って、

「いただきます。」

とあいさつをし、食べ始めました。

「こんなにもご馳走をありがとうございます。みんなと食べれて嬉しい。本当にありがとうございます。」

曾祖母は、涙を流しながら、何度も感謝をしていました。

「もー。泣かずに食べてよう。」

「ごめんなさいね。」

曾祖母のふにゃとした笑顔でまわりもあたたかい笑顔に包まれました。私は、幸せな時間だと思いました。そして、きっとそんな気持ちはみんなも一緒だろうなと思いました。

それから、片付けをする時間まであつという間でした。大人たちが片付けをしている中、子供たちは、曾祖母に一人ずつ呼ばれました。そして曾祖母は、私たちを、抱きしめ、温かい声をかけてくれました。気持ちの込もった温かい手で抱きしめてくれたことがなにより嬉しかったです。そして、みんなが一息をついた頃、再び机の周りに座り、過去の話や、みんなが大好きな共通の話題を話しました。

「久しぶりに集まれて良かったね。」

この一言でみんなが共感の返事をし、会えていなかった時間が少しずつ縮まったような気がしました。

私は、ご飯を食べるだけではなく、準備とその後の片付けやみんなで顔を合わせて会話することが毎年恒例の行事だと思いました。

コロナの影響で会えない時期があったからこそ、みんなで集まってご飯を食べること、会話をしたり、一緒に笑ったりすることの大切さを知ることができました。また、曾祖母の温かい手で抱きしめてもらったことがなにより嬉しく感じることができました。きっかけは、正月のご飯で曾祖母が涙を流したことです。けれど、温かい手を感じ、心の底から温まることが素晴らしいことだと気付きました。だから、少しでも多くの時間を家族や親戚と共有し大切にしていきたいと思いました。身近にいる家族や関わってきた人達からたくさんの愛情をもらってきたから、私も同じようにたくさんの愛情を注いでいきたいです。だから、

「次のお正月もみんなで食べようね。」

入選

気持ちを込めて

福山市立新市中央中学校

3年 市川 心 雪

私には隣の家に住んでいる祖母がいます。

「おはよう。いってらっしゃい。」

と毎日笑顔で声をかけてくれるので私はいつも元気をもらっています。でも、恥ずかしがりやの私は素直に「行ってきます。」と言えず

「うん。」

と言って素っ気ない態度をとるばかりでした。

ある日、私は午前中にある部活に寝坊し、遅刻してしまいました。部長だった私は部活で恥をかくのが嫌で無断で休もうとしました。私は祖母に相談しました。すると祖母は、

「人に迷惑をかけるのはいけん。あんたは部長じゃろ。しっかりしなさい。急いで支度して謝りに行きなさい。」

といつも優しい祖母が声を荒らげて言いました。私は思っていた反応と違いとまどいました。なぜなら祖母は「いいよ。仕方ないよ。」と私をフォローしてくれると思ったからです。私は少しモヤモヤが残りながらも学校へ向かいました。

学校に着いて、部活動の先生、部員に謝りました。怒られる覚悟でいると、

「次は気をつけてね。おばあちゃんから聞いたよ。ごめんなさいって。優しいおばあちゃんだね。」

と言われました。私はこの言葉から気付きました。祖母は私のためにあんなに怒ってくれたのだと。ただ優しく接するだけではなく、いけないことを「いけない。」と言うことで私に正しい選択をさせてくれたのだと。祖母は私のことを大切にしてくれている。だから私も「ありがとう。」という気持ちを込めて返そうと思いました。

その日を境に私は変わりました。素直になろうと。

「おはよう。いってらっしゃい。」

祖母の笑顔に対して私も気持ちを込めて、今までにない大きな声で伝えました。

「行ってきます！」

気持ちを込めて伝えられるようになったのは大好きな祖母の優しさからでした。



あーそーぼー！

三次市立吉舎中学校

3年 白 附 朋 華

小学5年生、6年生の時、私はバス通学でした。私が1年生から4年生のころはまだバスが無く、車で送り迎えをしてもらっていました。5年生になり、とても登下校が楽になったのを覚えています。

朝はバス停まで歩いて行きました。たまにバスが出発する時間に遅れそうになり走って行くこともありました。バス停まで片道約5分とはいえ、重たいランドセルをせおい、スカートで走ることはとても疲れしました。だから私は走って行かなくてもいいように、朝は早めの行動を心がけていました。走ることが嫌いだったというのも理由の一つです。それでも私は、バス停から家に帰る時はいつも走って帰っていました。早く弟に会いたかったからです。

私の2歳下の弟は、当時小学3年生でしたが、小学1年生の後半から学校に行っていません。いわゆる不登校です。

「なんで学校に行かないの？」

「一緒に学校に行こう。」

と言っても、学校的话题を出すと弟は不機嫌になり、無視されるため話になりませんでした。

母は弟を学校に行かせるために色々なことをしました。不登校になった時の対策の本をたくさん買ったり、カウンセリングに弟を連れて行ったりしました。しかし、弟に変化はありません。弟は学校に行っていないため、勉強も遅れています。母はそんな弟が心配でしかたない様子でした。

「高校生になったらどうすれば…」

「大人になったらどうすれば…」

ずっと、そんなことを考えて悩んでいたのだと思います。

そこで私は弟とある約束をしました。「ねえちゃんが学校から帰ってきたら、一緒に外で遊ぼう」という約束です。この約束をした理由は、弟は今までずっと家でゲームしかしていなかったのも、少しでも家から出て遊んで欲しかったからです。弟が1年生の時好きだった科目は体育でした。外で遊ぶ楽しさに気づき、学校に行きたいと言ってくれるのではないかと思いました。私はバス停から走って家に帰り、大声で2階にいる弟に向かって叫びました。

「あーそーぼー！」

少し不安でした。約束はしていたものの、本当に家から出てきてくれるのか。そもそも約束を覚えていてくれるのか。そんな事を考えていた時、玄関の扉が開きました。出てきてくれた。私はとても嬉しかったです。その後は一緒にサッカーをしたり、バトミントンをしたり、家の周りを走ったり、辺りが暗くなるまで遊びました。そんな日が2年近く続きました。

その頃から弟は、勉強にも積極的になりました。学校からもらったプリントを一緒に解いたり、教科書を一緒に読んだり、少しずつではあるけれど、弟は変わっていきました。私も弟のおかげで、走る事が少しだけ好きになりました。

弟へ。少しずつでいい。自分のペースでいい。変わっていく姿が見られてうれしい。いつかまた学校に行きたくなったら言ってね。一緒に走って中学校へ行こう。

入選

大好きなおばあちゃん

三原市立宮浦中学校

3年 森田 野乃花

私は、おばあちゃんが大好きだ。私のおばあちゃんは、私の家の隣に住んでいて、笑顔の絶えない素敵なおばあちゃん。おばあちゃんは、料理が得意で、よく美味しいご飯を私の家に届けてくれて、いつも

「いっぱい食べて大きくなりんさいよ。」

と言い、私の成長を優しく見守り、支えてくれていた。時々、おばあちゃんの家で食事をしたり、家でくつろいだり、一緒に外食をしたり、時には相談にも乗ってくれて、それが私の日頃の楽しみだった。よく心配して私の学校の帰りを待ってくれた時もあった。私のためになんでも尽くしてくれるおばあちゃん。私にとってとても心強かった。

そんなおばあちゃんが今年、5月のある日に朝、突然亡くなった。私は、その時まだ寝ている時間で、家族から知らされて起きたが、一瞬で頭が真っ白になり、何度も自分の頬を叩いて、夢を見ているのだと信じたかった。

その日は1日中涙が止まらなかった。だが、亡くなる前日に、おばあちゃんの家で一緒に食事をしていたので、おばあちゃんと最後の食卓を共に囲み、おばあちゃんに送る最後の言葉、「ありがとう」を伝える事が出来て本当に良かったと思う。でも、本音は「昨日まで元気だったのにどうして」と突然の別れに悲しい気持ちでいっぱいだった。そして、おばあちゃんがこの家にお別れする前に私は沢山手紙を書いて、おばあちゃんの横に手紙を置いた。読んでもらえたかな。

数日が経った。おばあちゃんはずっと笑顔で過ごしていたので、私も毎日笑顔でいよう涙を流さず立ち直ろうと思った。そして、大好きなおばあちゃんに感謝の気持ちを伝えようとお仏壇の前に座り、毎日手を合わせた。

それから、3か月が経った今、新しく知ったことが増え、これから大切にしようと思ったことがある。それは、当たり前は当たり前では無いということだ。私は初めて「当たり前」だと感じていた時の有り難さを知った。おばあちゃんといつものように一緒にご飯を食べて、一緒にお話をする。だけど、もう二度と一緒にすること無く、終わりを迎えてしまった。当たり前だと感じていることの有り難さを痛く理解した。当たり前だと感じていたものを今では、もう二度とないかもしれないと覚悟を決め、一つ一つの物事に感謝の気持ちを持つことにした。私は、その心を持つことの大切さを忘れないようにしたい。

そして、私の家に新しい家族をお迎えした。前から家族みんなが大好きだった柴犬だ。その柴犬は、おばあちゃんが亡くなった日に生まれ、名前はおばあちゃんの名前の漢字から取った、「祥^{シヨウ}」と名付けた。とても可愛い柴犬に出会えて本当に良かったと思う。また、これから祥の成長を見守り、一日一日を大切に過ごしていきたい。

入選

話せなくなっても

東広島市立松賀中学校

3年 山本 葵里

「おばあちゃんがおかしいんじゃない！はよ来てくれ！」

焦るおじいちゃんの声が聞こえた。私の祖母は1階に住んでおり、声を聞いた後様子を見に行った。階段を下りていくとベッドの上で動かない祖母の姿があった。熱だと祖父がいうので測ろうとしたが様子がおかしく感じた。かろうじて言葉を理解しているように見えたが、動くことも話すこともできなかった。その後すぐに救急車を呼び病院へ運ばれ手術をすることになった。

病院から戻った父から話しを聞いた。祖母は倒れる少し前から異変があった、と。その話を聞いたとき思い当たる節がいくつもあった。祖母が倒れる3日前くらいのこと、

「これ、どうやって戻すんかいね？」

とスマホをもって聞かれた。それは難しい操作ではなくて、普段なら意識しなくてもできるものだった。そして倒れる前日、私は祖父母の部屋で晩御飯を食べた。すき焼きだったようだが味がしなかった。その時はあまり気にしていなかったが考えればその時からおかしかったのだと思う。

祖母はいつも明るい人だった。いつも歌を歌ったり喋ったり、笑ったりしていた。小学校の頃、下校時に雨にぬれてびしょびしょの私にタオルを出してくれたり、靴を乾かしてくれた。暑い日にはクーラーの効いた部屋に入れて涼ませてくれた。読書も上手く小学校へ読み聞かせのボランティアをしに来てくれることもあった。それは私が卒業するまで続いた。

中学校に入り、祖母と話す機会が減ったように思う。比べものにならないくらいの宿題の量、部活動など時間がなくなっていった。でも、下の階から聞こえてくる祖母の声はとても明るくて、気持ちが落ち込んでいる時も元気になれた。

コロナ禍ということもあり、祖母が倒れてから会えたのは約1年ぶりだった。久しぶりに私達家族を見た祖母は涙を流していた。施設の人が、

「わかるんですかね、いつもより嬉しそうです。」

と話してくれた。久しぶりに会った祖母は言葉が話せなくなっていた。失語症というらしい。ただ、私達を見る祖母はとても嬉しそうだった。手で机を叩いて話しているようだった。施設の方に普段の様子を見せてもらおうと音楽を聞いている時は、手を叩いて楽しんでいた。元気そうで、嬉しくなった。

私は小さい頃から祖母にお世話になっていた。今度は私が、祖母にしてもらったように色々な話を、色々なことをしてあげる番だ。言葉が話せなくて文字が読めなくても、コミュニケーションはいくらでもとることができる。これから祖母がくれた今までの恩を返していきたい。

特選

尾道市立久保小学校

1年 宮本 泰志



おとうさんとぼくがしょうぎをしているよ。

入選

広島市立東浄小学校

2年 内田 さら



夏のフルーツを妹とたべてるところを書いた

東広島市立御園宇小学校

2年 廣光彩羽



かぞくでプールでおよいだよ。



家族みんなでセミとりをして、楽しかった。

3年 坂口 栞 椰

福山市立西小学校



かぞくでとうきょうタワーに行った。

4年 佐川 仁 望

東広島市立御園宇小学校

広島市立戸坂小学校

5年 三分一 陽



暑い夏家族とした流しそうめん最高の思い出

令和5年度「家庭の日」作文・図画募集要綱

- 1 趣 旨 健全で明るい家庭は、家族みんなで話し合い、家族みんなで楽しみ合い、家族みんなで力を出し合うことによって築かれます。
青少年育成広島県民会議では、毎月第3日曜日を「家庭の日」として定め、明るい家庭づくりの運動を展開しています。
この運動が広く地域に浸透し、多くの家庭で実践されることを願って、小・中学生が、家族や家庭について日頃思っていることや感じていること、家族と一緒に体験したことなどを作文や図画に表現した作品を募集します。
- 2 対 象 者 県内に在住の小・中学生
- 3 主 催 公益社団法人青少年育成広島県民会議
- 4 後 援 広島県・広島県教育委員会
- 5 協 賛 広島ロータリークラブ、広島南ロータリークラブ、広島東ロータリークラブ、広島東南ロータリークラブ、広島北ロータリークラブ、広島西ロータリークラブ、広島中央ロータリークラブ、広島西南ロータリークラブ、広島陵北ロータリークラブ、広島安芸ロータリークラブ、広島城南ロータリークラブ、広島廿日市ロータリークラブ、広島安佐ロータリークラブ、(敬称略、順不同)
- 6 応募方法
- 作 文
- ・400字詰め原稿用紙3枚程度とします。
 - ・縦書きとし、はっきりと書いてください。
 - ・題の次に、学校名・学年・名前(ふりがな)を記入してください。
- 図 画
- ・作品は4つ切りの画用紙とします。
 - ・描く材料は自由です。(クレヨン、水彩絵の具等)
 - ・ポスターではないため、標題やキャッチフレーズは書かないでください。
 - ・裏面の「図画応募用紙」に記載し、作品の裏に貼付してください。
 - ・作品のコメントも忘れずに記載してください。
- 注意事項
- ・一人1点に限ります。
 - ・本人の作品で未発表のものに限ります。
 - ・提出された作品は、返却しません。
 - ・企業名や商号の入った作品は対象外となります。
 - ・作成指導に当たっては、作品に直接手を加えないようにお願いします。
 - ・図画は送付時に丸めないでください。
- 7 応募数 作品は応募校で事前審査し、作文・図画それぞれ各学年5名以内で応募してください。なお、作品を書いた児童・生徒全員に参加賞を贈りますので、作品の応募総数を明記してください。
- 8 応募締切 令和5年9月4日(月)必着
- 9 送付先 〒730-8511 広島市中区基町10番52号 広島県環境県民局県民活動課内
(公社)青少年育成広島県民会議 電話 082-513-2742 / FAX 082-511-2173
- 10 審査方法
- (1) 予備審査は作文のみとし、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成県民会議職員が行います。
 - (2) 事前審査は作文のみとし、学識経験者、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成県民会議職員によって構成する審査員が行います。
 - (3) 作文・図画の審査会は、学識経験者、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成県民会議職員によって構成する審査員が行います。
- 11 表 彰 特選者は、青少年育成県民運動推進大会において、広島県知事賞の賞状及び賞品を授与します。入選者は、当県民会議会長賞の賞状及び記念品を後日送付します。
- 12 副 賞 特選者は、1万円の図書カードを贈ります。また、応募者全員に参加賞を送付しますので、必ず応募者の控えをお持ちください。
- 13 そ の 他 入賞作品は、当県民会議発行の入賞作品集や、機関紙「せとのあさ」に掲載するなど広く活用させていただきます。

審査員及び審査要領

●作文の部審査員

- 宇佐川秀輝 (公社) 青少年育成広島県民会議常務理事
石田 睦子 三次市教育委員会社会教育委員
小原 正啓 尾道市立百島中学校長
中村 好宏 広島県環境県民局県民活動課長
福田菜津美 広島県教育委員会学びの变革推進部義務教育指導課指導主事

●作文の部審査要領

1 選定方法

- (1) 特選 (県知事賞)・・・3 作品
- (2) 入選 (会長賞)・・・上位 20 作品程度を選定する。

2 審査の方法

(1) 事前審査

- ・小学校低・高学年、中学生の部をとおして、「家庭の日」の理解度、感銘度、論題にそつた論旨、論点の整理、表現力、文の構成等を審査する。
- ・評点は 10 段階評価とする。
- ・特選を 10 点満点とし、小・中学生をとおして、特選 3 作品を選定する。
- ・入選は上位 20 作品程度を選定する。
- ・学年ごとに平均して選定しなくても良い。

(2) 審査会

事前審査の結果をもとに協議し、相互調整して特選、入選を選定する。

●図画の部審査員

- 濱田 昭法 元広島県教育研究会美術部会会長・元広島市教育研究会美術部会会長
宇佐川秀輝 (公社) 青少年育成広島県民会議常務理事
住田 佳子 広島県教育委員会学びの变革推進部義務教育指導課指導主事
中村 好宏 広島県環境県民局県民活動課長
藤崎 綾 広島県立美術館主任学芸員

●図画の部審査要領

1 選定方法

- (1) 特選 (県知事賞)・・・1 作品
- (2) 入選 (会長賞)・・・5 作品

2 審査の方法

- (1) 作品ごとに、表現力、構成力、家庭の日の理解度等を審査する。
- (2) 候補作品を学年ごとに並べ、審査員は 1 学年ごとに、5 点ぐらい選定する。なお、各審査員同士が同一作品を選定しても良い。
- (3) 候補作品は必ずしも各学年から均等に選ばなくてもよいが、できれば小学校 (低・中・高学年)、中学校のバランスを考慮する。
- (4) 審査員が全学年の作品を見た後、(2)で選んだ作品を全部並べ、その中から特選 1 点、入選 5 点を協議により選定する。

令和5年度「家庭の日」に関する作文・図画応募校一覧表

小学校の部		作 文							図 画							応募総数	参加人数		
番号	学校名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	作・参加人数	1年	2年	3年	4年	5年	6年			計	図・参加人数
1	廿日市市立平良小学校					1		1	1	4	3	1				8	8	9	9
2	広島市立中野東小学校												1	1		2	2	2	2
3	福山市立西小学校									5	5	3	2	1	2	18	22	18	22
4	広島市立千田小学校				1	1		2	2									2	2
5	江田島市立中町小学校									1			1			2	2	2	2
6	広島市立井口小学校		1		2	3		6	6	5	3	2	1	2		13	20	19	26
7	福山市立御幸小学校		1					1	1	4	2	1	2	1		10	10	11	11
8	広島市立戸坂小学校			1	3			4	4	5	5	5	3	5	1	24	71	28	75
9	広島市立楠那小学校			1			1	2	2	2	1	1		2	1	7	7	9	9
10	尾道市立久保小学校									2			1	2		5	13	5	13
11	広島市立彩が丘小学校												1			1	1	1	1
12	広島市立大町小学校									5	2	5	3	1	2	18	19	18	19
13	広島市立古田台小学校									2		1	2	2		7	7	7	7
14	広島市立緑井小学校		1		2	2		5	5									5	5
15	広島市立口田東小学校									2	1	1	3	1		8	8	8	8
16	広島市立長束小学校				1			1	1	2		1				3	3	4	4
17	広島市立大河小学校			1		1	1	3	3		2					2	2	5	5
18	広島市立己斐東小学校									4		1	2			7	7	7	7
19	広島市立阿戸小学校			2				2	2	1	1	1		1		4	4	6	6
20	広島市立亀崎小学校		1					1	1									1	1
21	竹原市立竹原西小学校		1	1	4	3	3	12	12		2					2	2	14	14
22	福山市立春日小学校					1	1	2	2	3	1	2		1	1	8	8	10	10
23	呉市立坪内小学校		1					1	1	1	2	1				4	4	5	5
24	呉市立昭和北小学校					1		1	1		3			2		5	5	6	6
25	三次市立酒河小学校						1	1	1	1						1	1	2	2
26	広島市立東浄小学校		1		2	1		4	4	5	1	2		1		9	9	13	13
27	東広島市立板城西小学校		1					1	1	2	1					3	3	4	4
28	東広島市立西条小学校		2	2	1	4	5	14	23	4	1	2		1	1	9	11	23	34
29	呉市立川尻小学校		1		1	1	2	5	5									5	5
30	東広島市立小谷小学校	1	1	2	1	2		7	8									7	8
31	三原市立糸崎小学校	5	5	5				15	80									15	80
32	福山市立津之郷小学校				1			1	1	1	1	1	1			4	4	5	5
33	尾道市立長江小学校										1			1		2	2	2	2
34	呉市立安登小学校									2						2	2	2	2
35	三原市立小泉小学校									1	2		1			4	4	4	4
36	呉市立宮原小学校									2	2					4	4	4	4
37	東広島市立御園宇小学校		1			1	1	3	3		4	2	1		1	8	17	11	20
	合 計	6	18	15	19	22	15	95	170	66	46	33	25	25	9	204	282	299	452

令和5年度「家庭の日」に関する作文・図画応募校一覧表

中学校の部		作 文					図 画					応募 総数	参加 人数
番号	学校名	1年	2年	3年	計	作・ 参加 人数	1年	2年	3年	計	図・ 参加 人数		
1	広島市立可部中学校	5		5	10	138						10	138
2	広島市立宇品中学校	5	5	5	15	127						15	127
3	呉市立白岳中学校	5			5	30						5	30
4	広島県立三次中学校	5			5	51						5	51
5	東広島市立西条中学校	5	5	5	15	39						15	39
6	広島市立五日市中学校	4	2		6	25						6	25
7	呉市立倉橋中学校	1	3		4	10						4	10
8	三原市立第五中学校	3	4	5	12	18						12	18
9	福山市立松永中学校			3	3	18						3	18
10	尾道市立久保中学校	2			2	52						2	52
11	呉市立阿賀中学校	5	4		9	10						9	10
12	広島市立観音中学校	5	5		10	35						10	35
13	呉市立片山中学校	1			1	35						1	35
14	福山市立新市中央中学校	4	5	5	14	61						14	61
15	三次市立吉舎中学校			1	1	5						1	5
16	広島市立城山中学校							2	1	3	5	3	5
17	三次市立塩町中学校	1	1	2	4	10						4	10
18	廿日市市立野坂中学校	2			2	2						2	2
19	広島市立五月が丘中学校	2	4	2	8	8						8	8
20	三原市立久井中学校	3	2	3	8	40						8	40
21	呉市立昭和中学校	5	5		10	32						10	32
22	呉市立横路中学校	5			5	10						5	10
23	広島市立井口中学校	1			1	1						1	1
24	三次市立八次中学校		1	1	2	20						2	20
25	広島市立安西中学校		1		1	1						1	1
26	東広島市立磯松中学校	3	5	5	13	26						13	26
27	三原市立大和中学校	1	1	1	3	35						3	35
28	東広島市立安芸津中学校			2	2	11						2	11
29	竹原市立竹原中学校	5	5	4	14	29						14	29
30	廿日市市立四季が丘中学校	3		1	4	4						4	4
31	福山市立城西中学校	1			1	1						1	1
32	三原市立宮浦中学校	2		5	7	44						7	44
33	東広島市立松賀中学校	5	5	5	15	60						15	60
34	呉市立音戸中学校	1	2	2	5	10						5	10
35	北広島町立豊平中学校			1	1	1						1	1
36	呉市立東畑中学校		1		1	7						1	7
37	尾道市立美木中学校	2	4	1	7	25						7	25
38	呉市立天応学園		2	1	3	6						3	6
39	海田町立海田中学校	5	5	5	15	65						15	65
40	福山市立鳳中学校						2	1	1	4	4	4	4
	合 計	97	77	70	244	1102	2	3	2	7	9	251	1111

— 発 行 —

公益社団法人 青少年育成広島県民会議

〒730-8511 広島市中区基町10番52号

広島県環境県民局県民活動課内

TEL 082-513-2742

FAX 082-511-2173

URL : <http://www.hiro-payd.or.jp/>



笑顔生まれる、 元気なあいさつ

おはよう!

広島県の
青少年のマスコット
ゆっぴー

さようなら!

こんにちは!

ありがとう!

おやすみ!

